94
704

始

94
594

94-794

帝國圖書館藏

椿

田山花袋著

現代小品叢書
第壹篇

大正
2. 5. 8
内交

序

最近五六年間に書いた小品を集めて『椿』といふのは、別に意味のあることではない。丁度それを輯めようとする頃、椿の花が殊に私の眼に附いたからである。私は丁度其時友人のフランスに立つのを送つて、箱根まで行つた。國府津、酒匂、鎌倉の海岸には、葉の綠に、花の紅い野椿が到る處に咲いてゐて、それが降りしきる雨の中にはつきり見えてゐた。私は南國の春を想像した。椿油の出來る島々のことなどを思つた。それに、私の庭にも、椿の花が

多い。父親の遺愛のものなどもある。私が書齋で筆を執つてゐると、ぱり〳〵花の落ちる音が重く聞えたりする。春の花の中で椿の花の印象が私にはかなりに多い。で『椿』といふ名を此輯に得ることになつた。

大正二年四月

著者

目次

女峰の谷……二
北伊豆……二四
昔の家を見に……四六
郊外雜記……六五
山の雪……六五
車室の中……六六
歡喜の一刹那……六九
道灌の木像……七〇
奉納の額……七六
蕗の薹……七七
インプレッシーブな光景……七八
停車場……八〇

車窓の三山……八二
關東の平野……八四
山の電車……八八
幼なき頃のスケッチ……九五
白い花……九五
小さい影……九六
沼……九七
沼の主……一〇〇
遠い島……一〇二
酒……一〇五
赤いガス燈……一一〇
城址……一一二
落伍者……一一五
母の母……一一九
私の大きくなつた町……一二一

風……一二五
朝霜……一二九
北國の旅にて……一三二
紅葉山人訪問記……一五〇
川上眉山の死……一七八
春雨にぬれた旅……一九九
東京の郊外……二〇五
秋祭の頃の日記……二三三
港より島へ……二四四
晩秋の頃……二六一
町……二六八
山にある友に與ふ……二七八

目次

人生の一宿驛……二九九
草津から伊香保まで……三二一
午前……三二七

椿

女峰の谷

一

小さい祠が見えた。一行は勇氣百倍した。中には聲を擧げたものもあつた。遠く志して來た山の巓――私達は遂に到着した。

幹が一つで枝が七谷に亙るといふ堰松が、其處等一面に敷くやうに靡いて居る。其間に細い路がついて、それが山の巓の祠へと私達を導いて行つた。祠には風雨に曝された注連繩が見えた。

私達は今初めて周圍を振返つて見るやうな位置にあつた。大きな釜の縁のやうな處に立つて深い谷を覗いて見た時には、思はず胸が戰慄した。山の半腹を縫つた暗い森林は、行つても行つても容易に盡きようともしなかつた。岩や、木根や、笹原や、少しく開けたところからは、白い雪に蔽はれた大きな谷が恐ろしく見渡された。それでも私達は何うやら彼うやら行者小屋に着いて、其處で火を燃して、午飯を食つた。岩と岩との間からは冷い清水が滴るやうに落ちて居た。

八千尺以上の尖つた山の巓、今、私達は其處に立つて居る。始めは鳥渡解らなかつた方角も、見て居る中に段々それと指さゝれ

るやうになつて來た。すぐ前にある谷を隔てゝ大きな坊主のやうな山が見え、それに連つて、それよりも一層高い大きな山が半は雲に包まれて見えた。『それが男體だ』かう私達は指し合つた。

山も谷も雲も、下で見たのとは丸で異つた趣を呈して居た。山は廣い連續を惜し氣もなくその前に展いて見せ、谷は幾箇にもわかれた脈を地圖のやうに明かに並べて見せた。しかし一番私達の眼を驚かしたのは雲であつた。午後の日影を帶びた白い堆積は、大きな影を山から山へと漂はせて、谷から谷へと動いて行つた。

『何うだ、あの雲の影の大きいこと』

私達は思はずかう言つた。

後の谷は雲で包まれて居る爲めに殊に廣く大きく見えた。そしてその白い堆積の中からは、山の巓が丁度海の中の島のやうに其處にも此處にも顯はれて見えた。釜のやうな深い大きい谷からは鼠色の雲がもく〳〵と巴渦をなして上つた。

二

鬼怒川の峽谷は殊に大きかつた。雲の渦き上る底には、丘陵が地圖のケバのやうに見えて、幾百年を經た森林は苔か何ぞのやうに思はれた。平家の餘族の隱れたといふ谷、十數里の間村落が晨の星のやうに散點して殆ど世間から交通の絶たれて居る谷、冬は

全く雪と氷とに埋められて了ふ谷――その谷の底には水の音がそれとなく聞えるやうな氣がした。丁度山嶺を渡る風の音のやうに。

私は數年前其深い谷を一度通つたことがあつた。其處には溪流の中から綺麗な溫泉の湧き出るところもあつた。狹い谷合を水が凄じい瀨をなして流れ落ちて、藤蔓で編んだ板橋もその飛沫に蔽はれるといふやうなところもあつた。斜坂になつたところには草を刈る若い男女の群が居て、長い鎌が夕日に揃つて光るのを見たこともある。時にはまた、行つても行つても盡きない森林が果てしなく續いて、下に積つた濡れた落葉が、氣味惡い重い音を四邊に響かせるやうなさびしい山道も通つた。熊の話をする獵師、山

小屋の話をする老爺、挽物の材料を切り出す木地屋――私はさうした人達と話し合つて、靜かに其谷に過ぎ去つた長い年月を考へたこともあつた。

この裏の谷のさびしいのに引かへて、表の谷はいづれも賑かであつた。山から滴つて集つてそして世の中に流れ落ちる幾筋の溪流、其處には屹度崖が聳えて、綺麗な名高い瀑が落ちて、都の遊覽客が車に乘つたり籠輿に搖られたりして見物に遣つて來た。水の源を究めに、瀨を分けて深く入つて來る學生などもあつた。瀑、瀑見茅屋、其處に居る色の淺黑い村の娘、それから段々谷は開けて、林となり、叢となり、野となり、畑となり、人家となり、終

には白い埃の立つ街道となる。

霧降の澤、稻荷川の澤、寂光の澤、荒澤の澤、大谷川の澤、

――それが落ちて流れて集つて行くさまが、明かにそれと指點された。

ところどころから、――裏から或は表から見た風景は、今私達の前に大きなパノラマとして展開されたのである。

三

私達の立つて居る頂上から左に聳えて居る山、其處に至る間は全く『劍の峰』といふ名に背かないやうな嶮しい脊になつて居た。

鎖をたよりにそれに向つて下りて行つた時には、流石に私達も戰慄した。左右の深い谷は、板を竪てたやうに急傾斜をなして居るばかりではなかつた。馬の脊のやうな路は、幅が三四間、狹い處は二間位しかなかつた。それに石がごろ〳〵して居た。

私達は時々這ふやうにして行かなければならなかつた。堰松の枝にすがつたりすることなども度々あつた。一度足を踏み外せば萬事休すといふやうな處には、それでも鎖がつけてあつた。

午後の日影は、男體の肩あたりから、まともに其の馬の脊越を照して居た。寫眞の機械を持つた案内の男に續いて、ハンチングを冠つた丈の高い男、中折を前のめりにした男、洋服にゲイトル

をつけた男、一番最後に僧侶の帽子を冠つて、白い僧衣を纏つた男が續いた。

左右の谷からは、絶えず白い雲が湧き上つて、それに日影が美しく照つた。半は蔽はれた男體の大きな姿も、段々雲の中から其の全身を露はして來た。しかし私達はそれを眺める餘裕もなかつた。

うの馬の脊のやうな、劍の刄を渡るやうな路は、少くとも二十町ほど續いた。うれを無難に越え終せた時には、私達はホッと胸を撫で下した。

『豪い路だ。風の吹く日などには、とても通れんね』

かう言つたものもあつた。

今見捨てゝ來た『女峰』の頂の祠は小さく手に取るやうに見えた。成程山の脈はかうして辿つて行くのかと私は思つた。森林もある。崖もある。絶頂もある。かうした險しい路もある。山の連續といふことが私達に大きな山脈の光景を想像させた。

此方の山には林が續いて居た。影の多い此處からは、劍の峰からかけての女峰の夕照が此上なく美しく見えた。赤薙の谷は白い雲で埋められて居た。

其處からまた暗い深林が續いた。

志津の行者小屋までは無論今日は行かれなかつた。私達は何處か一夜を過すところを探さなければならなかつた。『これを下りると木小屋がありまさァ』案内の男はかう言つて先に立つて歩いた。

小さい祠のある處から、私達は又一目散に下り始めた。今まで折角登つて來たのを殘らず下りて了ふのかとさへ思はれた。しかし私達はもう大分山路に馴れてゐた。急傾斜を下る時には、腰を重く、手を輕く、丁度猿のやうにして下りて行つた。時には木の根に躓いて、危く前に蹄りさうになる時などもあつた。

下るに從つて、林は愈々深く廣くなつて行つた。葉がざわ〳〵と風に鳴つて、身は全く深林の海の中に埋められて了ふかとも思はれた。それは慈觀の瀑の上流から左右は女峰男體の麓まで廣く展げられた大きな森林で、櫸、山毛欅の白ちやけた幹が限りなく續いて見わたされた。

女峰の谷から流れ落ちる水は少くとも五六筋はあつた。熊笹の籔や、犀樹の茂や、さうした間を小さい瀑をかけたり、靜かな淀みをつくつたりして、人知れずさゝやかな音を立てゝ其水は流れて行つた。私達はその流の一つをさがして、夕飯の準備をしなければならなかつた。

此方の山と向ふの山との間に幅の狹い細長い平地があつて、私

達はやがて其處に出た。栗山に通ふ路、馬立峠――其先には、冬三月全く凍つて大きな丸い氷柱になつて了ふ三界瀑がある。

路の傍にある小屋の中には誰も居なかつた。私達は其處に荷物を卸して休んだ。それは栗山と日光から物を運んで來て互に交換する爲めに建てられた小屋であるといふことを案内者は話して聞かせた。挽物の材料、これは栗山から運んで來たものである。日光から運んで來るものには、醬油だの、酒だの、米穀だのがあつた。俵の中には茄子の鹽漬にしたのが一杯入つて居た。

『別に人が居ないでも間違はないんですね』

私達の一人が尋ねた。

『え、こんな山ん中ですからナァ、人間が正直でさ』

かう案内者が言つた。

『太古の風がありますね』私達はかう言はずには居られなかつた。

私達は其處からまた暫くの間、路のない林の中を縫ふやうにして歩いた。十月の夕暮の風はもう寒かつた。時計は五時を過ぎても私達は一夜を過すべき木小屋を見出すことが出來なかつた。

林の少し伐り開かれた間から、低い一軒の木小屋を認めた時、私達は歡呼の聲を擧げた。氣の早い、ものは一散に走つて行つた。

此頃は何處の木小屋にももう人は居なかつた。かれ等は夏近くなつてから、群を成して遣つて來て、秋の中頃にはもう急いで歸

つて行つて了つた。山から山へと渡つて行く木地屋の生活は、町や村に住んで居る人達には容易に見すかされなかつた。私達は小屋の周圍に木屑の一杯に散らばつてゐるのを見た。

『これは立派な小屋だ』

先に入つて行つた一人は、かう言つて其處から出て來た。

小屋には生木を干す爲の細長い爐が出來て居て、上には木を並べる棚が一面に吊つてあつた。仕事場といふやうな半仕切つた處には、木片や木屑が殊に多く積まれてある。寢る處や勝手元らしい處などもあつた。かれ等は木材のある處をさがして、それのある中は、二年も三年も續いて遺つて來た。かれ等は水のあるところ、風の烈しく當てないところ、山路から見透されないところを選んで、藤の蔓や蔦の蔓で巧に小屋を組立てた。

私達は漂泊の生活をかうした山中に送る民のことを考へずには居られなかつた。世の中に何があらうが、戰爭があらうが、殺人があらうが、うんなことは夢にも知らずに過ぎて行く人々の生活、うれは尠くとも私達の心を惹くに十分であつた。私達はかうした山中の小屋に一夜を過す運命に邂逅したのを面白くも意味深くも思つた。

四邊の林からは、夕暮の濃い影が迫つて居た。

『何うだ、紀念の爲めに寫眞を一枚撮らうぢやないか』かう私が

言ふと、一緒に來た寫眞を撮る男は、

『さうさな……もう光線が足りないかも知れない』

でもかれは四脚を立てゝ、レンズを廻して度合をはかり始めた。やがて黑い布を冠つて、光線を見て居たが、『何うかかうか映る』かう言つて、かれは人々のうの位置に就くのを待つた。

私は木屑の上に立つて居た。洋服を着た男は其傍に腰を下した。シャツポを冠つた主僧はそれから一間ほど右に寄つて、金剛杖を持つて立つた。案内者も其の中に入つた。

『小屋も全部入るやうにし給へ』

私はかう注意した。

水のある處までは一町ほどあつた。私は桶を持つた案内者と一緒に其處まで行つて見た。

熊笹が深く茂つて居た。路はやゝ降り加減になつて、處々に大きな岩が立つて居た。疲れた脚には、一町の路も餘り近くは思はれなかつた。

やがてさゝやかな水の音が聞え出した。其處には半ば草や木や熊笹に蔽はれた小さい清い溪流があつて、綺麗な水が此方の岸に偏つて淵をつくつて居た。

案内者がザブンと桶を其中に入れると、映つた草や木の影は一齊にチラ〳〵した。

五

私達はその水で持つて來た米を精いだ。急造の土竈に燃やした火は、暫くの間薄暮の濃い影の中に明かに見えて居た。

一行は疲れ且つ餓ゑて居た。佃煮の罐詰、牛肉の罐詰、それを切るのにも待ち兼ねて、ブウ〳〵吹きながら熱い飯を食つた。洋服の男が準備して來たウイスキーは火のやうに人々の唇に燃えた。

主僧は小さい瓢簞から酒をついで飲んで居たが、

『何うです、これも好いですせ』などゝ勸めた。

『面白いねえ、かうしたことは一生の中に幾度も出來やしないせ』

こんなことを言ふ人もあつた。

『酒も飯もかういふ所で遣ると、味が違ふんだから面白いぢやないか』

誰も彼も皆面白さうに見えた。酒を飲まぬ人達は、取つて置きの菓子を出して食つた。低い聲で詩を吟じ始める人などもあつた。人々は嶮しい坂、深い林、恐ろしい谷などを全く忘れた。

やがて夜は來た。風の音も絶えた深山のさびしさは何とも彼とも言ひやうがなかつた。遠くの水の音さへ分明と聽えて來るかと思はれるばかりの靜けさ！それは太古の靜けさであつた。

その夜は生木を干す棚の下の爐に遲くまで火が明るく燃えて居

た。さうして暖を取らなければならぬほど山は寒かつた。私達は笑ひ且つ話した。私達の顔は、丸で山中の民かと思はれるやうにろの火の光に照されて見えた。

ふとろの静けさを破つて、ある音が聞えて來た。

『ヤ……』

誰も皆一齊に耳を欹てた。

それは笛を吹くやうな冴えた高い聲であつた。始めは其聲の何であるかゞ解らなかつたが、段々ろれは鹿の鳴聲であるといふことが解つて來た。

『鹿だ、確に鹿の聲だ！』

異口同音に誰も皆な言つた。

『面白いなア、確かに鹿だ』

興の起るに堪へないと言ふやうに、洋服の男は耳を傾けながら言つた。

其聲は静かな谷に反響して谷から谷へと渡つて行つた。空には遲く月が上ると見えて、樹の梢が薄く明るくなつて來た。

遠くで水の音がする。

北伊豆

一

西風の寒い〳〵日の午後に、私等は三島驛で、豆相鐵道の小さな車室に乘り替へた。正面には晴れた空に富士の吹雪が雲のやうに立つのが見えて、竹藪で圍まれた百姓家だの、小川にかゝつた水車だの、箱根山を縫ふやうに並んで居る昔の並木松だの、三島の町家の家根に載せた石だの、いろ〳〵なものが早く〳〵眼の前

を通り過ぎる。

三島の名物は西風に嗅天下といふ諺から、例の富士の白雪溶けて流れて三島女郎衆のお化粧の水と言つたやうな話が出た。國府を此處に置いた頃から三島は既に伊豆の中心であつた。頼朝の謫された頃、北條氏の榮えた頃、殊に東海道五十三次時代の繁華が人々の頭に繰返された。峠の前後にある驛の特色などを例を擧げて語り合つた。

北伊豆の最も開けた處は、私等がこれから入らうとする狩野川の細長い流域である。伊豆は箱根から天城火山に連つて居るので山が非常に多く、平地といふものが殆どない。狩野川の豐饒な谷

でも、其幅が一里位なものである。冬と春との境、田には氷が張つて畠には麥がいぢけて、ところどころ梅が白く咲いて居るばかり、野も村も寂として居る間を、玩具のやうな小さな汽車が白い烟をぽッ〳〵と吐いて走つて行く。

小さい停車場が一つ二つ三つまで同じ谷の同じ野の同じ細長い丘陵に面した路の畔にあつた。時計の針が二時二十分の處を指して居るのをある停車場で見た。ある停車場では、腰の曲つた婆さんと田舍娘とが下りた。ある停車場では便所の傍に梅が白く咲いて居た。熟海の方に通ふ道路がその近くの踏切を横つて通じて居て、村の料理屋らしい家の前に、風が紙屑やら毛糸やらを吹いて

小さかな白い埃を立てた。

左の丘陵の下に人家が點々として疎らに連つて見えた。地圖には丁度其の見當に、蛭ケ小島としてある。韮山の町も近い。伊豆で韮山と謂へば、隨分名高い處であるが、それらしい繁華な町も見えない。向ふの人家がうれとしては餘りに見すぼらしいなどゝ言つて居たが、矢張、其の曉の星のやうな點々たる人家が韮山の町であつた。丘の上に松の大きいのが七八株固まつて聳えて居た。それが有名な韮山城址であつた。

江川の反射爐が汽車から見える筈だと蒲原君は言つた。初めにそれと思つたのは工場の煙筒であつた。次は中學校のペンキ塗の

家であつた。汽車は夕日を車内に漲らせながら夥しく動揺して進んで行く。韮山の疎らな人家も段々後に後になつて了つた。島崎君はハンチングに金縁の眼鏡、頭を窓に寄せて、鳥渡睡氣が催して來たといふ風で、眼をつぶつて居る。ある停車場に著いた時には、誰も皆な反射爐のことを念頭に置いて居らなかつた。と、不意に、武林君が『あれだらう、反射爐は？』と言つた。見ると、成程それに違ひない。丘と丘と相迫つた奥に、黄かゝつた灰色の不思議な形をした煙筒らしいものが三本立つて居る。

『島崎君、反射爐が見えますせ！』と私は起した。

島崎君は昨夜晩く今朝は早かつたものだから、つい假睡をして了つた！　などと言つて、居住を正して外套を合せた。一しきり幕末から維新の話が皆なの口に上つた。此間、陸軍でそれを保存する目的で、折角からんで居た蔓だの蔦だのを取つて了つたので餘程趣味はなくなつたといふ話なども出た。蒲原君は大きな聲で笑つた。

其話が盡きた頃には、汽車は狩野川の谷をもう大分深く來て居た。谷は狹く狹くなつた。竹藪の間から、碧い水が曲り曲つて流れて居るのが見える。右は高い絶壁で、左は高い岩山が聳えて居る。風の具合で、空氣が透徹つて、川が濃い寒さうな御納戸の色をして居た。

二

大仁驛で下りた。

溫泉客らしい信玄袋、鞄、小傘などがぞろ〳〵下りる。停車場を出ると、馬車が二三臺あつて、修善寺までの乘車をすゝめる爲め馭者がぞろ〳〵寄つて來る。私等は歩いて行くことにした。

大仁は田舍の町らしい町であつた。町役場があつた。警察分署があつた。小學校の廣場には放課後の十分を子供が騒いで遊んで居る。電信柱が街道につれて曲つて凄じい風に線が夥しく鳴つて居る。たばこと書いた招牌が其處にも此處にも出て居て、藥種屋の店には仁丹の大きな招牌が眼に着いた。山で伐つて挽いた檜の

板を、車が幾臺も載せて通つて行つた。

町を外れると寒い〳〵風だ。顔をうむけるので話も出來ない。ガラ〳〵と馬車があとから先を越して行く。

狩野川に懸けた橋を渡ると、間もなく村に入る。山の陰になつた故か、風が少しも當らなくなる。枝を縱横に張つた柿の樹や、綠の葉の間に赤い花を着けた椿の樹や、青々とした葱の畑や、葉の大きい珊瑚樹の疎い垣根の間をいろ〳〵なことを話しながら歩いて行つた。梅の花は半ば既に盛を過ぎて、白くなつて居た。

修善寺の谷の入口で、路は二つに岐れるのであるが、其處まで行く間は、鳥渡感じが好かつた。天城がもうすぐ前に連つて、明

日越えて行かうと思ふあたりに、白い雲が夕日に照されて、湧くやうに靡いて居る。下田街道は眞直に向ふに通じて居る。山の兩方から緩かに迫つて居る具合と、雲の具合と、道路の具合とが取合せて何とも言へぬ感を私に與へた。はる〳〵と長い半島の果てを窮めようとする旅情が湧きかへつた。

桂川の細い谷が右から來て、下田街道を越して狩野川に落ちる道の岐れる處に道しるべの石標が立つて居るのを、形が西洋式でめづらしいなどと言つて、私等は傍に寄つて見た。下田街道には荷物を載せた馬がぞろ〳〵列をなして通つた。路傍には水車が軋つて、水がさら〳〵と落ちて白く碎けるのが見える。

桂川の谷は平凡であつた。それにまともに吹付ける風がいかにも烈しかつた。人々の顏や耳が赤くなつた。島崎君は涙が出て仕方がないと言つて、いかにも辛さうにして居た。伊豆は暖かい所だと聞いて居たのに……衣服を一枚減して來ようかと思つた程であつたのに……こんな寒い目に逢はうとは知らなかつた。

修善寺は感じは餘り好くなかつた。水も平凡、谷も平凡、溫泉場も平凡、獨鈷湯など殊に俗惡であつた。入口に枳殼の垣のあることゝ、櫻が澤山栽ゑてあることゝ、居酒屋に馬子が酒を飲んで居たことゝ、寛の水に野蒜が摘んで洗ひ懸けてあつたことゝ眼に殘つて居るのは先づ其位である。

三

泊つた宿は客が一杯であつた。庭に谷川の水が引いてあつて、廊下へ傳つて行くやうに出來て居た。梅の白く咲いて居るのも寒かつた。飼つてある家鴨の啼聲も何だかけたゝましかつた。

私等の室の隣が便所で、その便所が可成汚い。裏の室を覗くと餘り綺麗でない夜具や枕が積重ねられてある。婢が白粉をべたべたとぬりつけて、代る〳〵違つた顔を出した。廊下と言はず、座敷と言はず、襖と言はず、總ての感じが汚くよごれて居るやうな氣がした。汚ないことを知らずに旅をした時代には、これでも結構好い旅籠屋であつたに相違ないが、今では汚ないのがよく解る

だけに一層感じが惡い。

菖蒲湯と言ふのがあつた。紅葉山人が『菖蒲湯に裸一貫の男見よ』とか何とか言つて、大に江戸兒を振廻して居るが、混浴の、何處の馬の骨か知れない皺だらけの媼樣や、何處の淫賣婦だか知れない女などが、男と共に平氣でボチャ〳〵遣つて居る處で、この男振を見て吳れいでも無からうと思つた。

夕飯には白粉のはげかゝつた汚い女の酌で、それでも酒を三四本飲んだ。私は例の醉つて寢て了つた。諸君は十時過まで茶を淹れかへて、菓子を食つて、いろ〳〵の話をしたといふことだ。印象主義に就いての議論が大分出たといふ。翌朝、島崎君が『君は

隨分大きな鮮をかきますね』と言つて笑つた。武林君は、『今朝明方でしたがね、家鴨が騒いで鳴いたのを知つて居ますか……屹度狐か何か捕りに來たんだと思ふんですがね』と言ふと、『さう〳〵夢のやうに知つて居ますよ』と蒲原君は言つた。

『さうして見ると、私も寢ましたかなア、昨夜餘り茶を飲んだので、よく寢られなかつたんですが、それを知らない處を見ると、寢たと見えますね』

島崎君はかう言つて笑つた。

天城を越えて下田に行かうか、伊東に行つて熱海に出ようかといふ話が定らずにゐたが、昨夜、とう〳〵下田へ行くことになつて、湯ケ島まで馬車を頼んで置いたが、それが朝の七時に遣つて來た。

寒い朝で霜が瓦に白かつた。

四

湯ケ島には、其朝の十時に着いた。

風は昨日のやうに無かつたが、朝の冷たい空氣を切つて馬車が駛るので、耳が寸斷れるやうに寒い。昨日は島崎君が困つたが、今朝は私が一番弱つた。途中は別に變つたこともなかつた。昨夜の殘りの菓子を馭者に遣つたことゝ、ツメ襟の洋服を着た、人の

よささうな小學校の先生に逢つたことゝ、枝の縱横に張つた柿の樹を武林君が煩悶してるやうだねと言つたので、それから柿の樹を煩悶してる木と言ひ始めたことゝ、青羽根といふ處で馬車を下りて、碌々火もありもしない火鉢に押冠せるやうに顏を當てたことゝ、段々天城が近くなつて、家の構造が山國の風を帶びて來たことゝ先づその位のものであつた。

まだ早いが兎に角、湯ケ島で、晝飯を食つて行かずばなるまいと言ふので、馭者に、旅舍に伴れて行くことを命ずると、馭者は一鞭加へて、ガラ〳〵と淋しい村を通り拔けた。四邊に溫泉宿らしいものもなかつた。

村を外れて、馭者は馬を留めた。

旅舍は？　と聞くと、其向ふにあるといふ。賃錢を拂つて、二三歩下ると、面白い景色が私等の前に展げられた。谷が二つに岐れて、見事な溪流が兩方から落合つて、其處に釣橋がかゝつて居る。橋の彼方には、こんもりした樫の木が茂つて、下には大きい岩に碎けた水が或處は白く、或處は碧く、頗る面白い趣を成して居る。『鳥渡堂ケ島見たやうな處ですな』と武林君は言つた。私共はしばし立盡した。

樫の木の蔭に、大きな旅館があつた。天然の美しい姿に對すると、じつとして居られぬのが私等の癖である。皆な言ひ合はした

やうに、昨夜此處まで來れば好かつたと言つた。此處まで來れば
あんなゴタ〳〵した汚い家に泊らなくつても好かつたのだ。私等
は俄かに起つた興を促されて、ぐら〳〵動く釣橋をわざ〳〵動か
して見たり何かして、少年にかへつたやうな心持で對岸に渡つた。
旅舍はしんとして居た。客といふものは一人もなかつた。三階
の一番好い室に私等は勝手に押通つた。欄干に凭ると、樫の葉の
日に照る間から溪流が美しく光つて、ざアと流るゝ音が屋を撼か
すばかりに聞える。西の小窓に、日影がくつきりと射して、蠅が
一疋ブン〳〵音をさせて居る。裏の障子をあけると、庭には古い
大きい梅が今を盛りと咲亂れて、碧の晴れた空にくつきりと捺し

たやうに鮮かに見える。鷄が二三羽遊んで居た。
私等の興は遂に一晩此處で泊るといふ迄に募つた。
『鷄をつぶさせて煮て食はうぢやありませんか』と島崎君は言つ
た。鷄を命じて先づ湯に行く。
さびれて居るので掃除が行屆いて居ない。硝子の破れたのが其
儘になつて居たり、衣裳をぬぐ處が埃になつて居たりした。けれ
ど人造石の廣い湯殿には客といふもの一人もなく私等の自由に浴
するのに任せてある。惜むらくは湯が温かつた。
私等は寛から湯の出る近くに身體を並べて、耳には水の音を聞
き、眼には硝子窓を透して樫の木の間を洩るゝ日の光を見ながら

長い〳〵間溫い湯につかつて居た。

五

午後四時頃、私等は散歩に出懸けた。

釣橋を渡つて、少し登つて、二つの谷の落合ふさまを見て居た。谷から流れて來る谷川は、人をしてよく其水上を思はしめるものである。私等は傾き懸けた日影が、瀨を成した水に薄くさびしく殘つて居るのを見て、言葉もなかつた。

細い路が川に添つて曲つてついて居た。私等は其の細い路を辿つて見た。其路は高い地位にあるので、下に展げられた谷川のさ

まが手に取るやうに見える。水の音が反響して谺のやうに聞える。私等は岸に低く茂つた樹木の梢と平行して歩いて行つた。其細い路に添つて、小さな溝があつて、綺麗な水が靜かに流れてゐるが、岸にすみれが咲いて居たのを島崎君は敎へてくれた。

何でも見ようと由つて其趣が變るといふ。此谷をめぐつて見ると、湯ヶ島の感じが最初とは餘程違つて來た。何となく全景を見たやうな氣がした。

谷の下流に橋がかつゝて居るのが見える。其處まで行つて、くるりと廻つて、歸ることにした。田畝に下りて、橋の畔に出た頃にはもう日影がかげつて居た。竹藪の下の道は暗かつた。

寒いので、幾度も湯につかつた。午後には女や子供が入つて居た。學校の先生も居た。川を越して村の人が湯を貰ひに來るのだといふことがやがて分つた。夜は箱ランプが一つついて居るばかりで湯殿は薄暗かつた。

私等は湯の中で村の婆さんと語つた。明日は天城をこえて下田へ行くことを話すと、『向ふは暖かでさア。もう菜の花が咲いてるでせう。此處は冬は寒い處で……』と言つて、婆さんは手拭で顔を洗つた。

寒い北伊豆から暖かい南伊豆に私等の心は飛んだ。

『明日は天城、下田』

と私等は繰返した。

昔の家を見に

小雨の朝、私達の成長くなつた家を見に出懸けた。

町から其處まで行く間には、私達の學んだ小學校があつたり、驅け上つて遊んだ土手があつたりした。

私達は到る處で推移の跡に邂逅して聲を立てた。

『おや、此處の家もなくなつた』

弟が、かう叫んだのも一度や二度ではなかつた。

多くは畑になつて、麥が青々として居る。晨の星のやうに散ばつた家屋には、大抵百姓が住んで居て、鼻洟を垂した子供や、髪を蓬にした上さんが、名高い町の旅館のしるしのついた番傘をさして通つて行く都の人々を見送つた。

處々に小綺麗にして住んで居る家屋があると思ふと、ろれは大抵小學校の敎員か役場の役人達であつた。

ある畑の前に來た時、弟は、『此處に菅原といふ人が住んで居たね。梨の樹を栽ゑて、此の道の處に小屋掛をして梨を賣つて居た。よく買ひに來たものだ』

『さうだね。町の湯の歸りに、母さんと一緒によく此處で休んだ

ものだ』かう言つた私はこの菅原といふ一家の運命を思ひ出さぬ譯に行かなかつた。其處には同じ年格好の遊び仲間があつて、よく遊びに行つては、怖い白髮の祖父さんに睨みつけられた。古い大きな家で、長押には長い槍が懸つて居た。二十七八まで嫁に行かなかつた蒼い顏をした娘が、いつもさびしさうに柱の傍で裁縫をして居たのが、今でも眼に見えるやうな氣がする。

『でも、今ぢや好いんだらう、惣領が東京でも名高い銅版師になつて居る。』

『兄さんと遊んだ人は何うした？』

『あれは臺灣に行つて死んださうだ。』私はかう言つて、

『しかし、うれももう久しい前のことだ』

私達は默つて歩いた。

雨は番傘にパラ〳〵と音を立てる樣に降つて來た。濕つた新綠は眼もさめるやうに鮮かで、處々に交つた菜の花の黃ろい畑が際立つて眼についた。蛙の啼く聲が何處からとなく靜かに聞えた。

其頃新しかつた家屋も古くなつて、したみが落ちて居るのも見えた。古い表札を見ては、『まだ此處に住んで居る』と言つたり、路の角の家を覗き込んでは、『あの家は何うしたらう』などと言つたりした。遠く過ぎ去つた昔は、私達の心に一種の哀愁と憧憬とを齎らすに十分であつた。

都會の響の中に過ぎ去つた長い月日は、矢張此處にも其跡を留めて居た。

『此處に年寄夫婦の百姓が住んで居た家があつたつけ』

私がかう言ふと、

『さう〳〵、古い汚い今にも壞れさうな家だつけ。稻荷さまの晩などに、裏からこつそり行つて雨戸の節穴に、ガッタンをかけて、ひどく怒られたつけな。己は兄さんによく絲を引かせられたもんだぜ』弟はかう言つて笑つて、『うれはさうと、うの向ふの長屋もなくなつたねえ。笠間、山形なんて、米搗が住んで居て、祖父さ

んに吩咐つて、よく使に行つたもんだ。明日、米搗に來て呉れッて、よく表から怒鳴つて入つて行つたもんだ。笠間だか、山形だか、中氣の動けない嚊が居たッけ。』

『笠間とか、山形とか、其時分はさういふ苗字だと思つて居たが、あれは皆な其の生れた土地の名を呼んで居たんだねえ。笠間の方は大きな男で、杵を下す度に、うん、うんと言ふのが癖だつけ。手拭を輪にして、それをそつくり額にすべらせて米を搗くさまが今でも眼に見えるやうだ。』

『さう、さう』と弟も思ひ出して笑つて、『母さんが一升飯をぺろりとやつて了ふッてこぼして居たッけなア』

いかにも懐しさに堪へないといふやうにして、私達は話しながら歩いた。

私達が初午の晩に太鼓を叩いた稲荷は、うれでもまだ殘つて居た。小さい華表が麥畑の中にうれと指さゝれた。しかし舊藩時代に厩があつたので、厩々と私達の呼んだ大きな家や、母親の仲の好い友達の住んで居た長屋などは、もうすつかり潰れて、青々した麥畑を見通しに、其頃機屋をして榮えて居た家の黑い塀が見えた。

機屋の妾が圍つてあつた茅葺屋根からは、機を織る音が四邊に響いて聞えた。

『今は、うの妾が本妻に直つて居るんだらう？』

弟はかう訊ねた。

『あの肥つた細君が死なうとは思はなかつたなア。あの細君が生きて居ると、面白いんだけれど……』

『でも、妾は居るんだらう？』

『うれは居るだらうけど……』

うれから私達は其の機屋の惣領の息子の話をしながら歩いた。大學に入れる積で、二三年東京に出して勉强させたが、旨く行かないので、家に歸つて、細君を持つて父親の手傳をして居た。處が日露戰爭に召集されて、運惡く常陸丸に乘つて沈沒した。捕虜

になつてロシアに行つて居やしないかといふ望もあつたが、後で其時溺死したといふことが段々解つた。『お父さん、すつかり落膽して了つたさうだ』私達はこの私達の遊び仲間の一人が、常陸丸で玄海灘に沈んだといふことに興味を持つた。

私達の成長くなつた家は、機屋の塀について曲つた奥にあつた。今は機屋の持家になつて居る。

私達は曲りかけて立留つて奥を覗いて見た。

小さな門が見えて、垣に山吹が一杯に咲いて居た。

私達は斷らずに入つて行く氣にはなれなかつた。

兎に角機屋を訪問しよう。で、私達は其方に行つた。機屋はかなりの財産を拵へて、もう昔のやうに盛に機屋をしては居らなかつた。

私は案内を乞ふ爲めに弟の内に入つて行く間を、番傘を翳しながら、一人其處に立つて待つて居た。雨は降つたり晴れたりして居た。

やがて弟は出て來た。

『居るか』

『うむ、居る。』

で、私も内に入つて行つた。此處等の機屋に見るやうな入口が

やがて眼に入つた。昔暗かつた藍壺は、向ふの壁を障子にしたので、明るい快い感じを私に與へた。

『ヤア、これはめづらしい』肥つた機屋の主人はかう云つて私を迎へた。途中で逢つても急には解らないほど、其主人の變つて居るのを私達は見た。

奥から出て來た丸髷に結つた主婦は、もう五十に近かつた。これがあの若い綺麗な、此處の細君の妬いた妾とは何うしても思はれなかつた。

『まア誠也さんに、謹也さん！……謹也さんの變つて立派になんなすつたこと……』かう言つたが、『でも、謹也さんはまだ昔の面

影があんなさるけれど、誠也さんは、途中で逢つたつて分らない』

挨拶などは其方除にして、主婦は唯驚いたやうに私達を見較べた。

私達は惣領の悔みから言はなければならなかつた。

『定が生きて居ると、さぞ喜ぶのでせうけれど』かう言つたが、主婦はろのまゝ奥に入つて、木の根つこの火鉢に火を入れて運んで來た。

主人はろれでも男だけに惣領の戰死に就いて愚痴らしいことも言はなかつた。『まア、國の爲めですから—』こんなことを言つて、『ろれにしても、皆な豪くなんなすつたな。誠也さんの噂は、家

の娘などもよくして居ますがな、豪くなんなさつたんだつてな。大變お錢にもなるッて言ふぢやないか、謹也さんは―』少し言淀んで、『もう三本かな？』

『えゝ』

弟が笑つて居ると、

『中隊長さんになつては、もう占めたもんだ。皆な立派になんなすつた。子供衆も澤山ゐるんだらうな？……ふむ、誠也さんが五人に謹也さんが四人、私達の年を取るのも無理はない。』

傍に居た主婦は、

『まアねえ、四人の父さん！　謹也さんが鼻洟を垂して、家の周

圍を飛んで歩いたのがまだ見えるやうですがね。まア、ねえ、本當に夢のやうね。』

こんな話は容易に盡きなかつた。

其處に二十ばかりになる娘が、茶と菓子とを運んで來た。娘は顏を赤くして、茶をついで出した。

『此の娘さんは？』

私はかう訊ねた。

『これが一番末ですがね』主婦は娘の方を見て笑ひながら言つた。

『お六さん？』

『いゝえ、あれの次ぎ。もうこれつきり家には居ないんですよ』。

續いて娘達の話が出た。惣領は東京の神田に嫁いて子供がもう三人居る。二番目のは足利の機屋に嫁いてこれももう二人目が生れるばかりになつてゐる。

『お雪さんは？』

弟は一緒に遊んだ娘のことを訊いた。

『あれも東京に行つて居ますよ。けれどもあればかりは、何うしてだか、子供がまだ出來無い』

『内にもお子さんがあるんでせう？』

『えゝ、あれの殘して行つた奴が二人居ますがね……』

かう言つた主人は、死んだ子息を思出すやうな風を見せた。

いろ／＼な話をしてから、

『實は、今日は家を見たいと思つて來たんですが、今誰れが住んで居るんですか』

『モスリンに勤める人に、つい此間貸しましたが……』かう言つたが、主婦に向つて、『お前鳥渡一緒に行つて上げな』

私達は表に出て、塀について、奥に入つて行つた。

主婦は私達の先に立つて行つて、住んで居る人に其話をして呉れた。

私達は其處に昔のなつかしい茅葺屋根を見た。目の盲ひた祖母さんが終日日向に背を向けて鼻唄を唄つた縁側や、祖父さんが棧

俵を腰につけて草を取こて廻つた庭や、母親が冬の寒い日につけ菜を洗つた井戸端などが昔のまゝに私達の眼に映つた。『この梅ばかりは惜しいことをしました。四五年前に枯らして了つて』かう言つて主婦は井戸端の側にある梅の枯木を指した。ゐれはよく實の生る梅であつた。私達は下に莚を敷いて、母親と一緒によく其實を落したものである。

井戸端は昔より綺麗になつて居た。其頃には菖蒲や草が一杯に繁つて、釣瓶の水を滴すと、夜など月の光が美しくゐれに碎けたものであつた。赤い素燒の井戸側は立派な井字形になつて居た。概して其時より綺麗になつて居る。庭には躑躅と山吹とが綺麗

に咲いて、畑にはゐら豆が大きくなつて居た。一枚明けた縁側の障子からは、新しい桐の簞笥が見えた。

少年時代に見た時とは違つて、家の周圍の狹いのを私達は感じた。物置小屋の蔭の畑などは殊に狹かつた。

主婦は種々と其時分にあつた樹の話をして聞せた。裏の栗の樹は驚くほど大きくなつて、今でも澤山實が生るといふ。厠の傍にある南天燭も丈高く繁つて居た。

桑の樹や、竹藪や、麥畑や、さうしたものゝ中に、私達は限りない憧憬の情を起すことが出來た。『昔のまゝだ、變らんものだね え』私達はかう話合つた。

ふと見ると、裏の障子を明けて、赤い手絡をかけた若い色の白い細君が此方を見て居た。

私達の翳した番傘に雨はバラ〳〵と音を立てた。

郊外雜記

山の雪

今年は山の雪を多く見た。中でも、赤城と榛名の間の奥に見える越後境の山の雪は殊に私の眼を惹いた。此方が茶褐色をしてゐたり、鼠色をしてゐたりするだけに一層その反映が見事だ。

『綺麗だね、あの雪は！　何處の山だらう。』

かう私が車掌に聞くと、

『武尊山あたりでせう。』

『沼田より奥かね？』

『沼田はもつと右に寄つてゐまさア。』

かう車掌が話した。坂東太郎は實に其間から關東平野に流れ落ちてゐる。

車室の中

晴れた日だッた。私は汽車の二等室を一人で占領して、指先の冷めたい足をスチームの管に當てゝ、仰向になつて、動いて行く

空を見てゐた。まア、何といふ晴れた綺麗な朝だッたらう？　私はそれを何う形容して好いか解らない。空でも、太陽でも、丘でも、家屋でも、人間の顏でも――それが皆キラ〳〵と美しく輝いてゐる。平生では見たくても見られないやうな鮮明と透徹とを萬物が備へてゐる。『まア、何んて、インプレッシープな色彩だらう。麥の綠――それすら簡單な綠ではない。立派な畫家が單純な中に複雜を十分に含ませたやうな色彩だ。何うだらう、空の碧さは！』

かう絶叫した私の心の中は言ふに言はれない歡喜の情で一杯になつてゐた。

私の頭と、私の朝の氣分と、空の空氣と、萬物の透徹と、汽車

の進行と、それが一緒になつて、ろして始めてこの印象的色彩が眼前に躍動して來るのである。

川――朝日――

丘――敎會堂――

高い煙突から渦き上る黑い烟――

停車場――

遠くの山――山の雪――

ろれが皆な私の氣分と一緒に躍動して動いて行く。

車室の中に人がゐたならば――一人でも人がゐたならば、此の氣分は十分に發揚することが出來なかつたであらう。自分で自分のこの氣分を押へて了つたであらう。幸ひ私は長い間、ろの車室に一人でゐた。仰向に寢た私の眼には絕えず明るい色彩が通つて行つた。

眞面目な、多望な、ろして敬虔な心持が近頃にめづらしく私の全身を動かした。

歡喜の一刹那

藝術家の歡喜――さういふ境を私は想像してゐた。藝術家に取つては自然のまことの色彩に十分に觸れ得たと思ふ時ほど、歡喜と矜持とを心に感ずる時はあるまい。その時は、藝術家は自然と

自己との間に何等の隔てを置いてゐない。そしてその一刹那は、藝術家に取つては、永久の一刹那でなくてはならない。

その一刹那の貴さ！

ろの時に際しては、竹籔でも、土橋でも、百姓でも、路でも、丘でも、何でも立派な繪畫であり藝術である。繰返して言ふ。ろの一刹那の貴さ！

道灌の木像

ある日、私は友達を送つて、近郊の停車場に來た。

矢張晴れた朝だッた。私は友達の汽車に乘るのを見送つてから、

ぶら〳〵ろこらを歩いて見ようと思ひ立つた。ろして停車場を町の方に出た。

其町は東京の近郊によく見るやうな町で、一條の大通がずつと眞中に通つてゐるばかりで、裏町といふやうなものは殆どなかつた。私は友達と飲んだ朝酒に醉つて、好い心持で歩いて行つた。一年餘も飲まずにゐた煙草をふかして見ようと思ふほどろれほど愉快な氣分で充されてゐた。私はとある小間物店に寄つて、敷島を一つ買つて、それをふかしながら、町の通りを歩いた。

朝から吹鞴に火を起してゐる鍛冶屋だの、日向に出て墓石の字を刻んでゐる石屋だの、細い煙筒から薄い煙を立てゝゐる湯屋だ

のが眼に着いた。女だの子供だの若い男だのが通つて行く。私はふと考へた。『私は實際人生に觸れてゐるだらうか。此處等にゐる人達と自分との間に何等の交渉を持つてるだらうか。學問とか知識とかでは、自分はいくらか人生を知つてゐるけれど、實際にこれ等の人の生活を知つてるだらうか。餘りに自己の狹い藝術の境に沒頭して、廣い天地を見廻はすやうな餘裕なしに生活してゐはしなかつたらうか。』かう考へると、今までの自分の生活が單に狹い範圍に限られてゐて、うの狹い中でひとりで得意で力んでゐたさまが今更のやうに眼の前に浮んで來た。

『天地は廣い。人は皆嬉々として生を樂んでゐる。』

かう思ふと、新しい生が私の眼の前に展開されて來たやうな氣がした。『私はこれ等の人達と共に生活し、共に呼吸し、共に生を樂しまなければならない。餘りに私達は執着の深い偏狹な生活を送つて來た。私達の生活は餘りにある小さな型にはまり過ぎた。餘りに物に拘泥し過ぎた……。私達は自覺といふことを考へた。しかし、自覺は遂に自覺でなかつたのを知らなかつた。無自覺の境が却つて自由で、自然で、うして活力に富んでゐるといふことを知らなかつた。』

其處に八百屋の店があつた。菜や、甘藷や、刻み牛蒡や、蜜柑などが朝日を受けて輝いてゐた。若い上さんが今年生れた赤兒を

負つてせつせと働いてゐる。亭主は荷車に野菜を入れた籠を載せて、これから行商に出ようとしてゐる。

『太田道灌の木像のあるのはこの近所ですか。』

私はかう亭主に訊いた。

『すぐ其處です。向ふに木が見える。あろこから入つて行くんです。石が立つてゐますから、すぐわかります。』亭主はわざ〳〵通りに出て指さして丁寧に教へて呉れた。

此町に來たら、太田道灌の木像のある寺を訪ねて見ようと、私はかねて思つてゐた。で、私は歩いて行つた。成程、其處にはしるしの石が立つてゐて、奥を覗くと、古い高い石段が見えて、ろ

の奥に茅葺の小さな堂が立つてゐる。片側は淡竹の藪、片側は小松菜の青い畑の奥に小さな家の格子戸などの見える處を通つて、私はろの石段を登つて行つた。寒い西風が梢を鳴してゐた。

木像を納めた堂の前に私は長い間立つてゐた。其處には七月何日の外平日には堂を開かないといふことが書いてあつた。とても駄目だとは思つたが、寺の玄關に行つて、案内を乞うて、『木像を見せて戴けないでせうか』と言つて見た。『平日は見せません』といふ重々しい和尚の聲を私は耳にした。

私は別にさう大して木像を見たいとも思つてゐなかつたので、ろのまゝ踵を旋して、今度は寺の裏の方へと行つて見た。枯れた

草藪がガサ〳〵と風に靡いて、其向ふには、工兵隊の大きな赤煉瓦が谷を隔てゝ見えてゐる。谷には工場が二三軒あつて、小さい低い煙突から黒い煤煙がちぎれるやうに風に吹かれてゐる。

私は長い間其處に立つて、太田道灌のことを考へてゐた。

奉納の額

堂に昔の——砲の成績を示した板が額になつて掛つてゐる。遠州掛川の藩士の奉納したもので、嘉永何年と書いてある。うの來歴を讀むと、今度掛川藩で、砲術の練習をした。ところが某氏の砲術は百發百中で、實にその妙を極めてゐる。で、それを乞うて、

道灌公二百年祭の紀念とすると書いてある。私はこれを讀んで、此處等が武藏野の薄、尾花であつた時代と、江戸の片田舍であつた時代と、汽車や飛行機の通るやうな今の時代とを、比べて考へて見ない譯に行かなかつた。私は長い間其處に立盡してゐた。

蕗の臺

四十雀、あをぢ、雲雀がもう其時野を高く鳴いてゐた。

石段を下りる處に、蕗の臺が五つ六つ出てゐた。私はうれを採つて袂に入れた。

インプレッシーブな光景

町を北に外れたところに、荒川の流が流れてゐた。其處には舟橋がかゝつてゐて、それを渡り終ると、暫しの間、路は川の岸を川口町の方へとついてゐる。そこから戸田の鐵橋が見える。

鐵橋の上を丁度汽車が通つて行つた。

川口町は近郊では非常に發展した町の一つだ。四五年前までは、停車場もなかつたし、こんなに澤山工場もなかつた。それが驚くほど大きな變化をしてゐた。鐵工場が到る處に出來てゐた。

町から停車場へ行く廣い通で、私はある小さな繪のやうな光景を見た。五六軒の二階建の長屋を背景にして、其處に、井戸側に、

赤い手絡をかけた若い大丸髷の細君が、小松菜を桶に入れて、白い腕を二の腕まで出して一生懸命に洗つてゐた。若々しい頰から胸の處にかけて日影が當つてゐた。私はある時ある人に話した。

『インプレッシーブに物を見るといふことが肝心だ。そこから新しい見方と鮮やかな心持とが生れて來る。光線と、色彩と、場景と、この三つの上に築き上げられた感じ、それより外に何もない、何もない――』かう言つたのを思ひ出しながら私は歩いた。

インプレッシーブに見るといふことは、此方の心持の外觀の物質に對して絶えず動いて行くといふことである。平凡に見て通つて了はずに、何んな平凡なことでも平凡でなく見て行くといふ

ことである。此方の心持さへ動いてをれば、向ふの物は何でも——

——何んな平凡なことでも面白く見える。

一杯のビール、それでも人の感興をひくことはめづらしくない。

停車場

日が當つてゐる。停車場の前の休憩所には汽車に乘る人が五六人休んで待つてゐる。瀬戸の大きな火鉢に手を翳してゐる老人などもゐる。酒の渇いた後の咽喉をサイダに濕してゐる人もある。赤い襷をかけた女中は、ある客の爲めに、町に電話をかけてやつてゐる。『あゝさうですか。一つ包みを忘れて來たんですが、大急

ぎで持つて來て下さい』黄い聲が手に取るやうに聞える。其處に喇叭の音がして、ガラ〳〵と馬車が遣つて來た。

ぞろ〳〵と人が下りた。

停車場では、五分を報ずる鈴の音が勢よく鳴り始めた……と、群集は其方へと群をつくつて出て行つた。改札口では、驛夫が立つて、切符を切つてゐる。

何といふ廣く展開された眺望の好いプラットフォムだらう。一面に展開された野と村落との上に、近い處は五六里、遠い處は十里乃至十二三里を隔てた山脈が、雪を帶びて光つて日に輝いて見渡されてゐるではないか。濃い群青に染められて、うして雪が幾

條となく白く條をつくつてゐるではないか。『關東平野でなくつては見られない景色だ』私はかう思つて、凝とそれに見入つてゐた。そこに汽車が來た。

車窓の三山

上毛の三山を見るに、一番適してゐるところは、前橋市から澁川町に行く間であると私は思ふ。その電車の中からは、殊にそれがよく見える。

中でも、妙義が一番趣に富んでゐる。其處から見ると、實際、雪舟などの書いた文人畫の遠い山のやうになつて見える。純な碧

色をしてゐることもあれば、ブリウ・ブラックの色を呈してゐることもある。金鷄山と金洞山との交接點の處が殊に畫趣に富んでゐる。赤城は三山の中では、ろの翹楚と言はれるだけあつて、山容は殊に見事である。それにこの山は富士と同じやうに、ろの聳えてゐる位置が好いから、何處から見ても綺麗で、名山の稱を恥しめない。裾の長いのもろの一特色である。

榛名は相馬ヶ嶽の曳いた裾のところが好いと思つた。私が見た時には、丁度ろこに白い烟が高く〳〵捲き上つてゐた。淺間の烟ぢやないかしらんと初めは思つたが、段々さうでないことがわかつて行つた。ろれは野火であつた。淺間はやがて白く大きく、革

命の巨人のやうに、榛名の左端から次第にうの姿をあらはして來た。

電車は此間を輕快に駛つて行つた。茅葺屋根だの、珊瑚樹の垣だの、桑畑だのが絶えず私を送迎した。ある百姓家の軒には、梅が白く咲いてゐた。

關東の平野

關東平野、濃美平野、越後平野、この三つは、日本での三大平野と稱せられてゐる。うの中でも、關東平野は帝國の首府を有してゐるので殊に名高い。しかし、私の見る所では、關東平野に住

んでゐる人間が中でも一番殺風景なやうだ。女などにも、張りとか意氣とか言ふところはあつても、情味とか情趣とか言つた點は甚だ乏しい。柔かなねばりつよいところがない。すぐ怒つたり、むか腹を立てたりするやうな女が多い。何ぞといふと、男に肱鐵砲を呉れたり何かするやうな女が多い。うして負けると、きまつて痩我慢をやる。本當に強いと言つたやうなところは何處にもない。これと言ふのも矢張地形に依ることであらう。三つの平野の中で、一番關東平野が痩土であることなどもうの原因の一つであらう。

關東平野は、平野と言つても、うの平野になつた歴史が餘程古

い。新しい歴史――越後平野だの、濃美平野だの、大阪平野だの持つてゐるやうな新しい歴史は、關東平野では、僅かに東京灣に面したところが持つてゐるばかりである。從つて、平野の形や狀態が餘程變つて來てゐる。越後平野だの濃美平野だのでは、溝渠と大河と泥淖とが多く、樹木は殆どないと言つても好い位だが、關東平野では、河は下流のものよりも中流のものが多く、灌木の林は到る處にあつて、泥淖は僅かにうの東南部に二三あるばかりである。

越後から歸つて來た私は、關東平野を始めてつく〴〵注意して見るやうな人であつた。里川、楢林、萱原、竹藪、さういふものなどは越後平野には殆どないと言つても好い位である。勿論うれは關東平野に比べてゞあるが……。うれに、風の強いために、防風林をつくる習慣があるので、關東平野には平野にはめづらしいほど樹木が多い。

濃美平野あたりでは、薪が非常に不足してゐるので、百姓は主として藁を燃料にするさうであるが、それから比べると、關東平野は薪や炭に富んでゐる。薪炭を東京に輸入するのを以て聞えてゐる停車場があるといふ位だ。

それから、關東平野の人達は、手を暖める習慣がある。關東人の火に當るといふことは、體や足を煖めることではなくて、唯單

に手や顏を暖めることである。だから、爐といふものよりも火鉢の方が多く用ゐられる。停車場に出されてあるものなどでも爐よりも火鉢の方が多い。

『關東人ほど手を暖めるものはない』越後から歸つて來てから、かう私は度々人に話して聞かせた。

山の電車

賑やかな溫泉場を後にして、だら〳〵と下りて行く道は、やがて私達を都の方へ行く電車の終端停車場へと伴れて行つた。

風の寒いのも道理だ。私達の前には、眞白な、殆ど他の色彩を

見ることの出來ない雪の山脈が壁のやうに一面に連つてゐて、ろこから風がヒュー〳〵吹いて來た。『風がイタイ、風がイタイ』と言つて、妻に負はれた子供が泣いた。

停車場には明るい日が當つてゐた。私達は送つて來た人々に案內されて、暖爐の焚いてある廣い停車場の事務室へと連れて行かれた。私達は椅子に腰を掛けて、發車の時刻が來るのを待つてゐた。

冬の溫泉場の三日、何んなに寒い〳〵日を私達は送つただらう。火燵に入つてゐても、後から寒さがぞく〳〵と身に沁みて來る。湯に入つた當座は體が暖まつてゐても、ろれが一時間とはつゞい

てゐない。で、私達は朝に、晩に、夜中に、寒い〳〵と言ひながら浴槽に飛び込んで行つた。

湯元から來る湯の鐵管には、氷柱が簾のやうに垂れ下つてゐた。ある崖から崖へ通る處では、氷柱が長さ二十間もあるやうなのがずらりと並んで下つてゐた。谷間から卷上げる風は烈しい力で樹を鳴したり落葉を散らしたりしてゐた。

『何うも、冬は駄目ですな、寒くつて。』

かう私は傍に立つてゐる送つて來て呉れた人に言つた。

『これで四月になると、ぐつと違ひますけれど。』

『湯もいくらかぬるいですな。』

『何うしても途中で冷めますから。』

『花の咲くのはいつです、四月末頃には咲きますか。』

『五月ですな、五月の中頃にならなければ、本當に咲きません。』

『ぢや、東京ぢや葉櫻の時分ですな。』

かう言つた私は、山奥の殘櫻の頃を頭にうかべてゐた。

『うの時分は好いでせうな。』

『え、うの時分になりますと、もうお客が隨分澤山になつて參ります。』

一間の片隅では、事務員が一生懸命に十露盤を彈いて計算をしてゐた。一人の事務員は卓に向つて、頻に數字を簿記帳につけて

ゐた。

窓硝子を隔てゝ雪の連山が白く見えてゐた。

ふと見ると、卓の上に、山躑躅の鉢植にしたのがあつて、蕾が大きく膨らんでゐた。赤く見えてゐるのもあつた。『躑躅がもう咲きますね。室の中はもう晩春の氣候ですね』私はかう言つて、やがてやつて來る春を想像した。

やがて發車の時刻は來た。

私達の乘つた車室には、丸い鐵製の火鉢があつて、火が活々と起きて來た。それに、日が南から當るので、室の中は矢張春のやうであつた。頰の紅い兒を膝の上に抱いた妻は矢張赤い頰をして

ゐた。

電車は幾曲となく折れ曲つて行つた。森林測候所の家屋のある近所には、日に照された暖かさうな芝生などがあつた。檜――ことに杉の葉の綠は、繪具を今塗つたかと思はれるほど、鮮やかな生々した色を呈してゐた。

電車が屈曲する度に、赤城の雪が車窓の右になつたり左になつたりした。日影は絕えず南から東に移つた。松原の中を通る時に、送つて來た人は、其處は、秋になると、初茸が澤山に出て、何んな子供でも女でも、小さな籠に一杯位はぢき採つて來るといふ話をした。

で、段々山を出て行つた。送つて來た人は、とある停留場で、丁寧に私達に挨拶して、ろして別れて行つた。ろれは大きな松の樹のある停留場であつた。やがて野は私達の前に展けて來た。

（大正二年三月）

幼なき頃のスケッチ

白い花

私の生れた家には、朴の大きな樹があつた。幼い頃の記憶では、一番先に其の葉の大きい幹の太い朴の樹が頭に浮んで來る。私はある日縁側の處で遊んで居た。と、バサ〳〵と言ふ大きな音がして、上から何か落ちて來た。

ろれは朴の白い花であつた。

小さい影

私達の遊んだ士族町は、大きな沼に臨んで居た。畠と畠との間に士族の屋敷があつて、其境には玉蜀黍などが靡いて居た。私達は豆畑の中に入つたり茶畑の中にかくれたりしてよくかくれんぼをした。夜、母親に伴れられて錢湯に出かけて行つたことは、今だに分明と頭に殘つて居る。

錢湯は沼に近い處にあつた。それは士族の一人が馴れぬ商賣を始めたもので、風呂屋らしい面影は少しもなかつた。風呂はそれでも大きかつたやうに記憶して居るが、店は普通の家のつくりで主人夫妻は湯に入りに行く人達に一々丁寧に挨拶をして居た。時には茶など淹れて出した。

月の明るい晩に、其錢湯の前で、母親の出て來るのを私はよく待つた。其時は沼はピカ〳〵と眩ゆい程、美しく光つて居た。蘆荻の上に置いた露も光つてゐた。私は母親の傍に寄り添ふやうにして歩いた。くつきりと地上に落ちたその小さい黑い影！

沼

沼には追憶が澤山ある。

沼に注ぐ汚い小さな川、そこには白い紅い花が咲いて居た。いつでも漁師の田舟が二三艘繋いであつて、長い竿がそこにさして

ある。小言を言はれても言はれても、私達はよく其處に出かけた。舟の中に莫蓙を敷いて、其處に花や草を摘んで來ては並べて遊んだ。其頃は女の友達が多かつた。折角綺麗に並べた處に、何うかすると、舟の持主の漁師が遣つて來て、大きな聲で叱られて、何も彼も捨てゝ遁げ出すやうなこともあつた。ある漁師はやさしい聲で『おや〳〵綺麗に並んだ』などと言つて、其莫蓙を花ぐるみそつと地上に移して呉れた。

ズホンの森といふ深くしげつた森が其處にあつた。ゐれはゐの森の中に、人には決して姿を見せない恐ろしい怪鳥がゐて、嘴を沼の中に入れて啼くので、ゐれが沼中一面に響き渡る。ズホン、

ズホン、ズホン……夜など其聲を聞くと、子供達は皆な怖がつて蒲團を冠つて了つた。

沼から漁師はいろんなものを持つて來た。菱の實、蓮の實、槍矛、紅い白い蓮の花、じゆんさい、藻の白い花――其處にはめづらしいものが澤山あつた。漁師の大きな苓箸の中には、金色の鰭をビク〳〵させた大きな鯉やぬる〳〵した氣味のわるい鰻やゴチヤ〳〵動いて居る泥鰌などがあつた。大きい蓮根なども持つて來たむくりつちよといふ羽の赤い鳥も捕つて來た。

一貫目もあるといふ大きな鰻を捕つて來た若い漁師は、をりから其處に居合せた漁師達に苓箸の中からつかんで出して見せた。

鰻はくる〳〵とその手に巻き附いた。

幼い私達に取つては沼は尠くとも不思議なものであつた。私は夜遅くまで、蒲團の中で、大きな眼を明いて、沼のことを考へて居たことなどもあつた。いろ〳〵な不思議なめづらしいものゝある沼を。

沼の主

母親は沼の主の話をして聞かせた。

ある時、殿様の一人の姫が、家來をつれて、躑躅の花を見に、舟で沼を渡つて行つた。と、ろの眞中で舟は急に動かなくなつた。

姫は沼の主の大蛇に見込まれた。こんな話をして聞かせた。

今でもろの主は居る。母親は現にそれを見たかのやうにして話した。四斗樽位の太さのある大蛇が沼の蘆の中を通つて行つた跡を見た漁師は幾人もある。現に、大蛇の通つて行く毒氣に觸れて二日二晩病らつて死んだ漁師もあるなどと話した。

『たがら、沼に遊びに行くもんぢやないよ』

かう言つて母親はいつも私を引留めた。

沼の向ふには、城址があつた。其土手の大きな杉の樹には、夕方になると、鴉がよく集つて來た。それを縁側の隅に立つて、私はいつも見詰めて居た。『夕燒小燒あした天氣になァれ』戸外では

子供達は大きな聲を出して騒いで居た。

遠い畠

遠い畠があつた。

其處に父母は綿をつくつた。私は父母につれられてよく其の遠い畠に出かけて行つた。瀬戸の火鉢と火打石。その火打石を母親が打つと、パッと火花が散つて、黒いホクチに火がチラ〳〵と移つた。

父母は其處で一日働いて居た。ろの間を、私は一人草をつんだり花を採つたりして遊んだ。時には退屈して、『お母さん、歸る、

歸る』と言つて泣いたことなどもあつた。畠に入る處に一間位の小さな川があつて、ろれを母親は私を負つたまゝ飛越えて行くのを例にして居た。その川には小さい赤い花が咲いたり、目高が泳いで居たりした。

其畠の近くには、堀切と言つて、用水を溜めて置くところがあつた。幅五間、長十間位で、周圍には蒲だの、蘆だの、萱だのが繁つて居た。樹の枝などが無闇に投り込んであつた。水は深かつた。

父親は何うかすると、釣竿を持つて行つて、其處で鮒や鯉などを釣ることがある。さういふ時には、私はいつでも其傍に行つて

見て居た。赤い浮標が上つたり下つたりするのが面白かつた。たゞなごといふ小さな赤い綺麗な魚のかゝるのが待遠しかつた。ろれがかゝると、父親は私の持つて居る茶碗の水の中にろれを入れて呉れた。

この遠い畠で忘れられないことが一つある。ろれはある年、水が出たことがあつた。川の土手が切れて、今日水が來るか明日水が來るかと人々は皆な心配して居た。其日は父母は畠にある綿を皆な摘んで來る氣で出かけて行つた。父母はせつせと綿をつんだ。雨が降つたり止んだりしてゐた。

『土手が切れた！』

かういふ聲が何處からともなく傳つて來た。私はすぐ母親の背に結付けに負はれた。父親は採つた綿の籠を背負つた。見ると、水はピカ〳〵に光つて遠くから押寄せて來た。

酒

ろれは父が死んでからのことだ。

ある秋の晴れた日、私は祖父につれられて一里半ほどあるなにがし神社の祭禮に出かけた。私は綺麗な衣物を着せられて、其時分流行つた赤い帽子を冠つて、喜び勇んで從いて行つた。

祖父は近所でも有名な酒客として聞えて居た。頭の禿げた背の

低い小づくりな人で、其時分まだ元氣であつた。平生、私に珠算を敎へて呉れるのを一日の仕事にしてゐた。私は學校から歸ると嫌でも應でも其前に坐らせられた。長い大きな古い算盤の前で、私は屠所の羊でもあるかのやうに、難かしいかけ算や割算を敎へられた。

なにがし神社に行く途には、矢張同じ祭禮に出かけて行く大勢の人達がぞろ〳〵と通つて行つた。赤い衣物を着た子供や新しい駒下駄を穿いた娘達が嬉しさうにして歩いて居た。

神社の境内は人で埋められるほど賑かであつた。私は祖父の後について、社殿の前に行つてお辭義をした。踏みかへされるやうな

人込の中で、祖父は落付き拂つて、鈴を鳴して拍手を拍つた。

其雜沓の中を辛うじて出て氣がつくと、私は、お辭義をする時傍に置いた蝙蝠傘を其のまゝ其處に忘れて置いて來て了つた。祖父は戻つて取つて來いと言つた。私は再び雜沓をわけて其處に行つて見たが、もう其處には蝙蝠傘はなかつた。

それから私は祖父につれられて、ある料理屋に上つたことを覺えてゐる。その料理屋は川に臨んで居て、其處には家鴨が飼つてあつた。私はその家鴨を面白がつて見て居たことを覺えて居る。

何時間位其處に居たか、祖父が何の位酒を飲んだか、それを私は覺えて居ない。幼い私には、酒といふものも解らなければ、酒

に醉ふといふことも分つて居なかつた。

祖父は餘程醉つて居たものと見える。呂律も十分に廻らないといふ風で、何か頻りにくど〳〵言ひながら歩いて居た。通りすがる人達は皆な振返つて見た。

『醉ぱらひだ』

かう言つて行く人もあつた。

稚い私も何だか不安心なやうな氣がしたと見えて、祖父の袂を後からしつかりと押へて居た。

やがて醉に堪へなくなつたといふやうに、祖父は畑の中に入つて行つて、うこに撞と倒れて了つた。私の驚いたことゝ言つたら！

私は今でも其時の驚愕を明かに覺えてゐる。私は聲を擧げて泣出した。

子供が畠の中で、大きな聲を擧げて泣いて居るのを見て、其處を通る人達は、何事かと思つて、皆な其處まで入つて來た。しかし誰も皆な笑つて出て行つた。私は祖父の醉が覺めるまで其處で聲を擧げて泣いて居た。

一時間ほど經つと、祖父は其處から起上つた。

死んだやうに倒れて了つた祖父が、そこから平氣で歩いて行くやうになつたのが、稚い私には非常に不思議であつた。うれが酒の醉といふものだなどとは思ひもかけなかつた。

赤いガス燈

この祖父の晩酌の酒は私はよく買ひにやられた。

一日何も用事のない祖父は、二合の晩酌を此上なく樂みにして居た。初めは彼方此方の酒屋に自分で出かけて行つた。何處がはかりが好いとか、何處が酒が好いとか行つて、三時頃になると、きまつて風呂敷につゝんだ德利を抱へて出かけて行く。ろの姿が今でも眼に見えるやうだ。

しかし後にはろれも大儀になつた。代りに私がよくやられた。しかし遊びざかりの私は、母親に吩咐られて、其德利を持たせられるのが此上なく厭であつた。何んの彼のと言つては、ろれを遁

れやうとした。私は十一歳位であつた。

私は近路をして、其の酒屋に行つた。それは畑の中のさびしい道であつた。しの竹の籔があつたり、柴の垣があつたりした。栗の落ちた頃には、德利を地の上に置いて、垣の中に首を入れて、中に落ちてゐる栗の實を拾つたりした。

途中の或家には、庭の粧飾として赤く塗られたガス燈が一箇立てゝあつた。まだ硝子燈のめづらしかつた頃で、ろの赤い色彩はさびしい田舍の空氣の中に際立つて綺麗に見えた。私はろれを見ながら、いろ〳〵な空想に耽りながら歩いて行つた。

城址

城址は後には私達の遊び場所となつた。荒れ果てた城址――其處には淡竹の籔があつて、私達はよく筍を取りに行つた。

草が一面にしげつて、路も解らなくなつて居た。濠の水は、草や木の中から薄暗く光つた。岸には蔺がツン〳〵生えて居た。

城址には隱れた獲物が澤山あつた。葡萄、草ぼけの實、ぐみの實、虎杖――春先には野韮が多く出た。山芋を堀りに行く人もあつた。

草や樹を映した濠の水は、封建時代の榮華を夢みるやうに見えた。三の丸の門の址には、土手が赤い膚を見せて居た。大きな石

もごろ〳〵轉つて居る。

母親や祖父の語つて聞せて呉れた物語はうゝのやうであつた。つい十三四年前まであつた榮華がさう早く滅びて了はうとは鳥渡思はれなかつた。大きな樹の多かつた城で、お國替で始めて此處に來た時には、人々はろの外觀の見事なのに驚いたといふ。私は城の土手の樹に來る鴉や鳶が好きで、母の背に負はれて、よく其處に見に行つた。しかし其頃はもう城の主は住んで居なかつた。

城の燒けたのは、私の五歳の時で、西風の盛に吹く日であつた。なにがしといふ家柄の家の子供は、障子の傍で母親の言ふことを聞かずに火惡戯をして居た。忽ちにして火が障子に移つた。アナ

ヤといふ暇もなく火は家の中に廻つた。立派な邸宅はろれからろれへと燒けて行つて、火は遂に新御殿に及んだ。消防の術も至らず、水も澤山になかつた當時にあつては烈風の火を煽る壯觀を見て居るばかりで、何うすることも出來なかつた。私の家では、其時祖父も父も東京に出て居る留守であつた。母は三人の子供と老いた盲目の祖母とを抱へてまご〳〵してゐた。晝の火事ではあるが、見て居ると、黑煙がもく〳〵と天に漲つて、ろの凄じさは言ふばかりもない。やれ三の丸に移つたとか、本丸が危いとか言ふ聲が頻々として耳を打つた。其時、私は晝寢をしてスヤ〳〵寢て居た。母は火が不明門に移つたら子供と老祖母とを伴れて遁れようと決心して、私をそのまゝに寢かして置いた。私は城の燒け落ちる間、小さな呼吸を立てゝ靜かに眠つて居たのであつた。

幸ひにして、火は本丸から沼の方へと出た。私の家は燒けなかつた。

其火事は封建時代の榮華の最後を亡ぼし盡したやうなものであつた。人達は灰燼の中に移り變つて行く世の中を嘆いた。其の嘆息の跡に草は生えた。

落伍者

封建時代の落伍者の悲劇はかなり多かつた。乞食のやうになつ

て町を彷徨つて歩く家老の子息があつたり、馴れない商賣に手を出して公債をすつかり亡くして了つた人があつたりした。

私の家から遠く離れない處に、黒い塀を取廻した大きな邸があつた。それは維新前には榮華の限りを盡した國家老次席の人の住宅であつた。其處には品の好い細君と綺麗な可愛い女の兒が居た。

主人は常に蒼い顏をしてブラ〳〵してゐた。

霜の白く置いたある冬の朝、突然銃聲が四邊の寂莫を破つて響いた。

今の音は？　と思つて、細君が行つて見ると、主は獵銃を咽喉に宛てゝ、すつとも言はず死んで居た。

いろ〳〵な噂が立てられた。書置が書いてあつたとかなかつたとかといふことが長い間それからうれへと語り傳へられた。私は自殺といふことを其時始めて知つた。何うしてそんなことがあるのだらうなどとも考へた。夕方など、ろの可愛い女の兒が一人門の處に立つてゐるを見て、堪らなく可哀相な思をしたこともあつた。

丈夫な體をして、終日家にブラ〳〵してゐるやうな人が其頃は多かつた。品の高い爺さんが棧俵を腰につけて草を取つて居たのなどもあつた。後れた者はドシ〳〵置いて行かれるやうな時代であつた。

漸く取附いた職を失つて、絶望の淵に陷つて居る人達は、青い

顔をして、終日長大息を吐いて居た。

纔かの公債、纔かの田地――それを數へると、ぢつとしては居られなかつた。木から落ちた猿、さうした狀態によく似て居た。

ある人は生活の方法に思ひ屈して、後には蒲團を冠つて寢て居た。

ろれから病を獲て死んだ人もあつた。

私達の住んで居た屋敷町から、一里ほど行くと、かなり大きな川が流れて居た。岸には竹藪がつゞいて居た。ある朝、其處に死んで居たものがあるので大騒ぎになつた。それは私達の義理ある伯父に當る人であつた。名を縫助と呼ばれて居た。『何うして縫助はそんなことをして呉れたんだらう』かう言つて祖母は盲ひた眼から涙を流した。

階級の打破、職業の失墜――ろの暗い影の漲つた中で、私は成長くなつた。

母の母

私は母の母を微かに覺えてゐる。

ろれは常に床の上に寢て居る病人であつた。やさしい莞爾した顔をして居た。母に連れられて行くと、『よく來た、よく來た』と喜んで呉れた。

枕元の重箱の中に菓子だの饅頭だのが入つて居た。

私が行くと、すぐうこから何かしら出して呉れた。『成長くなつたナア。好い兒になつたなア』かう言つては私の頭を撫でた。

何だか混雜した家であつた。伯父さんに伯母さん、うれに大きな從弟達が多かつた。母の母になる人は、十年もさうやつて寢た切りで起きることも出來なかつた。三度の飯も養つて貰つて食つた。

幾歳位の時であつたか、一夜、その祖母の危篤を其處から報じて來た。其時は伯父はもう田舍に引込んで其の多い子息を相手に全く農に歸して居た。母は其の報知のあつた時、火鉢の傍で裁縫をしてゐた。私もまだ起きて居た。

車を町から雇つて來て、母に伴れられて、一緒に出かけて行つた時のことを私ははつきりと覺えて居る。町を外れると暗い暗い闇の田舍路が續いた。松林の中で、泥濘に邂逅して、殆ど車が覆りさうにした時、母は『あゝもう死んだと見える。なんまんだ〳〵』言つて念佛を唱へた。

行つて見ると、果して死んで居た。伯父の家族はもう其處には居ないが、その墓は今でもうの村にある。

私の大きくなつた町

私の大きくなつた町は平野の中の摺鉢の底のやうな處にあつた。『わり飯とろゝにたんと』といふ唄がある位で、餘り色彩に富んだ町ではなかつた。

冬は赤城おろしが吹荒んで、日光連山の晴雪が寒く街頭に光つて見えた。

さびしい町、暗い町、衰へた町、寒い町であつた。

それでも盆踊は盛であつた。大手の門の跡に廣場があつて、其處に近在のものが集つて來て、夏の夜の明くるのも知らずに盆踊を躍つた。冴えた樽の音、それが町を始めとして、町を取圍んだ村々から盛んに聞えて來た。丁度銀河の明かになつて來る時分で

すいちよが其處にも此處にも鳴いて居た。

木槿の垣は其處此處にあつた。紅い白い花は私の眼に親しかつた。それから秋季皇靈祭の時分には、私達は町を通り越して、その向ふの松林に初茸狩に出かけた。初茸の出るやうな松林は到る處にあつた。

それに小さな沼の多いといふことは四邊の風景を複雑にした。松林の間から沼に添つた夕日の路が見えて、向ふに小學校の白壁が指さゝれる。鮒、鯉、鰻、川鰕、雑魚、蓴菜、蓮の實――私達はさういふものに常に馴らされて居た。

機杼の音、それも町の特色の一つに數へて好い。チャンカラ、

チャンカラ、其音は思ひ出してもなつかしかつた。それから造酒屋の大きな家の多いのも町にはふさはしい。

三七の市日には、近在から百姓達がぞろ〳〵出て來た。種物を賣る店、呉服物を賣る店、唐物を賣る店、さういふ處には常に夥しい人立がした。

七夕の夜は賑かであつた。鳥だの、獸だの、人物だの、いろ〳〵なものを燈籠に刻んで、それを家々の軒にかゝげる。大きいのもあれば小さいのもある。殆ど町の通りが燈籠で一杯になるやうな有樣で、稚い私にはこれが何よりも珍らしかつた。其夜は町は灯にかゞやいて遠くからは丸で火事のやうに見えた。

凧

凧を揚げる風習も隨分盛んであつた。春先、空に聞えるうなりの響を聞くと、私達は敎場にぢつとして本を讀んで居られないやうな氣分になつた。

學校の前の廣い長い大通、そこでよく人達は大きな凧を揚げた。障子一枚位のは普通で、大きいのになると、二三十人もかゝらなければ揚らぬやうなのがあつた。西の内九十六枚といふ大きな凧を揚げたのを一度見たことがある。骨は丸竹で、うなりは鐵板を細く長く引いたものであつた。糸は井戸縄位太さのある麻縄で、

ろれを三人で抱へる位の大きな笊に入れて來た。下で見ては、餘り大き過ぎて凧の字が解らないが、揚がると『輝』といふ字がはつきりと勇ましく空に見えた。

それを揚げる時は騷ぎであつた。大抵な凧の揚らぬやうな烈風の時を選んで其人達は遣つて來た。先づ城址の廣場に凧を持つて行つて置いて、ろれから麻繩を長く引いて來る。凧を持つ男が六人位は何うしてもかゝる。麻繩には五間位間を置いて二人づつついて居る。凧があがると、人が猿のやうに麻繩にぶら下つた。

その鐵板のうなりは勇ましい響を四近に振はせた。九十六枚が揚つた！　其響を聞くと人々皆かう言ひ合せた。

それを揚げた人達は學校の前の廣場に集つて居た。大きな石に麻繩の末端を結ひつけて、さも愉快さうに圈をつくつて揚づた凧を見て居た。私は一度棒のやうな其麻繩に觸つて見たことがある。

しかし一年に三四度位しかこの大きな凧の揚がるやうな風は吹かなかつた。何でもその鐵のうなりの音が三年位つゞいて聞えたが、ある年、餘り烈しい風に糸が切れて、凧は飛んで沼の中に落ちて了つた。

これに限らず、さま〴〵の凧を人達はよく其處に揚げに來た。春先は、殆ど凧のうなりで空が一杯になるといふやうであつた。

長い尾のついた大きな凧が、他の大きな凧にすくはれて、倒さになつて空にかゝつてゐるさまは壯觀であつた。

其頃、私は凧を自分で拵へることが好きであつた。それに上手であつた。繪の具を買つて來て、『龍』といふ字だの『雲』といふ字だのを隈取つて書いた。拙い武者繪なども書いた。

私の家の前の土手の陰には、萱の深く繁つた日當りの好い處があつた。私は揚げた凧を持つては、ひとりでよく其處に行つた。私は尾を長く曳いた凧が青い空に捺したやうになつて旨く揚つて居るのを見るのが好きだつた。

朝霜

私は十一歳の時、半年ほど足利の藥種屋に丁稚に行つたことがあつた。其頃、子弟を商人に仕立てやうとすることが士族の間に流行した。役人は免職の心配がある。自分で捗いで生活して行く商人に限る。誰も彼も皆なかう言つた。

稚い、無邪氣な、まだ世の中のことも知らない子供は、かうして悲しいロオマンスの一節のやうに、ある冬の寒い朝、ひとり車に乘せられて、その遠い町に行つた。私は其時、母がシャツやら股引やらを買つて、丁稚姿に仕立てゝ呉れたことを覺えてゐる。私は赤い襟卷をして居た。

車夫は母からいろ〳〵な注意を與へられた。遠い親類の番地などをも紙片に書いて渡した。『辛抱しなくつてはいけないよ』かう言つて母親は道の角まで送つて來た。

私はさびしかつた。今までに經驗したことがないだけそれだけ言ふに言はれない心持がした。私を載せた車は、松林の中だの、沼の縁だの、汚ない町だのを通つて行つた。山には雪が朝日に光つて居た。

町に入らうとする處に大きな川があつた。私は車を下りて、渡舟の來るのを待たなければならなかつた。舟はやがて來た。船縁には白く霜が置いてあつた。船頭は車夫と一緒になつて、車をそ

れに載せた。

船頭の長い竿につれて、船は靜かに中流に出た。私は泣きたいやうな心を抱いて、水の朝日に光るのを見て居た。

北國の旅にて

私は雪に埋れた山の中の百性家の奥の一間に居た。私と向つて、火燵に當つてゐる主人は、二十二三年前に、東京のある巷路の中の小さな夜學校で、私と一緒に英語の初歩を習つた人だ。私は昔に變らない顔を見、同じ調子のなつかしい言葉を耳にした。その家もその室も更に昔に違つたところがない。……であるのに、時は過ぎてゐる。二十二三年の時日はいつの間にか過ぎ去つてゐ

る。『光陰はある時は飛鳥よりも早く、ある時は牛ののろい歩みよりも遲い』かういふ諺がロシアにあるが、本當にさうだ。かう思つて、私は稍小鬢の白くなつた主人の顔を凝と見た。

晩に、いろ〳〵な人が遣つい來た。東京に出て失敗して歸つて來たやうな人達が多かつた。牛乳配達から段々成功して、かなりのところまで出て行つた男は、女の爲めにすつかり裸になつて、やう〳〵旅費だけ持つて歸つて來た。湯屋の三助をした男は、肥つた大きな體をして、眼鏡などをかけてゐた。『是非、もう一度東京に出て見たい』と言つてゐた。村の山ふところになつた處に、

微温い鑛泉が湧き出てゐるのを、放つて置くことはないと言つて、ある男が其處に小さな溫泉宿を開いて、浴槽などを作つた。此村に來る時、私はろの傍を通つて來た。面白いものが出來たと思つて通つて來た。その男は言つた。『金がねえいで駄目でがんさ。こゝの旦那なんかでも、もうちつと袒をぬいで呉れると、造作がねえいだが――』かう言つて大きな聲をして笑つた。

私の知つてるもので、もう此世の中にゐない人もかなりあつた。あれも死んだ。かれも死んだ。かう言つて私達は話した。

湯屋の上さんがゐた。四谷鹽町に、今でもある柳の湯をその亭主が持つてゐたことがあつて、私達は其時分よくろの二階に出懸

けて行つた。その上さんが亭主と一緒に金を殘して田舍に籠つたといふことは曾て聞いてゐたが、其處でさうして逢はうとは思ひもかけなかつた。三十位な、ちよつと小綺麗だッた上さんが、五十五六になつて、もう中婆さんになつてゐた。亭主はもう十年も前に世を去つてゐた。『東京から草津を通つて、此處に來いした時には、それでも面白かつたが、もう、はア、遠い昔になりやした』私はいろ〳〵なことを考へさせられた。

私は旅中、フロオベルの "Bouvard and Pecuchet" を持つて行つて讀んだ。二人の主人公が都會を去つて、田舍に出かけて行く

あたりを丁度ろの時讀んでゐた。

『何を遣つたッて駄目だ。皆な失敗ばかりだ』かう言つて、唯、ぢつと暗い心持で世の中を見てゐるやうなフロオベルの心持が、一頁毎に私の心を動かした。いかに熱した努力を以てしても、ろの事業は忽ちにして亡びて行つて了ふではないか？　何んな烈しい戀でも愛でも忽ち雪のやうに解け去つて了ふではないか？　一頁毎に作者はさう言つて嘆いてゐるやうに思はれた。此作には、時に對する作者の絶望が殊に明かにろの背景をつくつてゐた。

折角築き上げた二人の事業が種々の災害に逢つて片端から壞れて行く悲哀――ろれは戀とか慾とかから起る悲哀のやうなものではなかつた。ろれは人間の次第に亡びて行く悲哀であつた。二人は自分の家屋の燒け落ちるのを見てゐた。

『あの山の上に、家があるでせう。あろこで葡萄を作るんですがね』

かうろの友達は私に話した。

『土地の人ですか』

『いや、餘所のもんですがね、二三年前から、あろこに來て、葡萄をつくり始めたんですがね』

『旨く行きますか』

『好い加減なもんでせう』

『一人ですか』

『え、嗅に子供がありますがね』

私はBouvardを思ひ出した。Pouchetなし の Bouvard を想像した。他郷からあの山の上に來て、小屋を建てゝ、うしてさういふ事業を始めた男を想像した。雪に埋れた山の上のその小さい家には、丁度その時朝日が晴れやかに當つてゐた。

建設の悲劇であり、破壞の悲劇である。——すべて皆な……。あらゆるもの總て皆な……この原則を免れない。

私は雪が庇の上まで積るやうな處を通つて行つた。ある停車場は全く雪に埋れて、電信柱が僅かにうの先を三尺ばかり積雪の中に出してゐたやうなところもあつた。今まで見えてゐた山は忽ち見えなくなつて、風雪は汽車の窓を暗くした。

うの近所には、俳人一茶が『これがまアつひの栖家か雪五尺』と吟じて、うして遂にうこに一基の墓となつて了つた村もあつた。うこの停車場では、工夫がツルハシで雪の塊を構内に投つて路を明けてゐた。『正宗、すし、辨當』と呼んで歩く男の前の桐油に雪が白く積つてゐた。

一生の中に幾度通るだらう？　もうこんなところは通るやうなことはないだらう？　かう思ひながら曾て通つた、村をまた通つて行つた。同じ鍛冶家があり、同じ料理店があり、同じ男がゐる。『光陰は牛ののろい歩みよりも遲い』實際さう思はれる。

辛い生活だ、さびしい生活だ、退屈な生活だ、早くこんな生活は經つて行つて呉れれば好い。こんなことを考へる時には殊に時間が長い。

しかし、これも生きてる間だ、墓になつてからは長いも短かいもない。一茶が死んだ時と、雪が降つてゐる今と――いや、電話が出來たり飛行機が出來たりした今と何の變りがない。墓はうの時の儘だ。

生きてゐる間にのみ存在してゐる時だ。これを思へば、どんな辛い境でも、どんな退屈な時でも送られるやうなものである。こんなことを私は考へた。

ある停車場からは、漁師の嗅らしい女が三人も四人も、魚を賣つた後の籠をかついで、天秤棒を持つてうして入つて來た。腥い魚の臭が四邊に充ちた。

『何うだつたえな？』

『駄目なこんだ……』

こんな會話が取交された。

話を聞いてゐると、昨日の凪ぎで、その濱では、鰛が殆ど取り切れないほど獲れた。二十年來ないほどの鰛の大漁！『えらいこんだ。鰛が固つて來ると、漁師がろの上に乘つても海ん中に落ちないだからな——えらいもんさ』その中の男の一人がかう言つて話してきかした。嗚達は濱の近所で安く賣るよりはと思つて、汽車に乘つてこの山の中まで賣りに來たのだ。汚れた財布は銀貨や銅貨にふくれて、ガチヤ〳〵と景氣の好い音を立てゝゐた。

黒く涅つた齒、ぐる〳〵と無造作にたばねた髪、血色の好い顏——實際生效のある生活であると思つた。かれ等の頭には、今夜家に歸つて、暖い圍爐裏の傍で、どてらを着た亭主と一緒に樂しい一夜を送るといふより他に何もないのだ。かれ等の頭には時間もなければ空間もないのだ。自覺しない生活には生もなければ死もない。——さういふ境に今私は對してゐる。

知つた境から知らない境を見てゐる心持である。暗いもしくは明るい境から、明るいもしくは暗い境を見てゐる心持である。——私はその境を羨しいやうな心持で見てゐた。

一時間後に、私はその大漁のあつた濱を汽車で掠めて通つた。

そこの停車場は小さな停車場で、茅葺の屋根が砂山の其處此處に點々として散在してゐた。松が疎らにそこらに生えてゐて、砂山の向ふから、波の音が地を動かすやうに轟いて來た。

停車場には鬚の濃い人の好ささうな驛長がゐた。

ろの近所は雪がさう深くなかつた。土地が處々に露はれてゐた。松が松に續き、波の音が波の音に續いた。

私の乘つてゐる向うに、鳥打帽をかぶつて、頭をドアの處に寄せて、兩脚を長く前に伸して、そして低く詩を吟じてゐる一人の

中年の男がゐた。

中音で、そして何とも言はれない哀愁の籠つた節廻しで、體を靜かに搖りながら、餘念なくかれは吟じてゐた。汽車の音にまぎれて、汽車の停つた時には、松の音と波の音とに交つて、靜かにしめやかに……。

王郎劍を拔いて……。ろの雄壯な調子の詩が靜かに沈んで、そして何とも言はれない、諧調を持つて私に迫つて來た。私は頭を振り顏を擧げて頻に詩吟に熱中してゐるその色の白い男の顏を見ながら、抑揚の巧みな人の心を何とも言はれない境につれて行く詩吟に耳を傾けた。……ある停車場で、その男は吟じかけた詩を

途中で止して、うして、そゝくさと下りて行つて了つた。あとは松の音と波の音とが續いた。

さびしい諧調が私の胸に來た。

『此處は鉢崎ですな』

今まで何も言はなかつた人が、突然かう私に向つて言つて、そしてあわたゞしく汽車から下りて行つた。私は古ぼけた外套を着た、眼のキョロリとした、背の馬鹿げて大きい、高い足駄を穿いた四十ばかりの男の後姿を吃驚したやうな心持でぢつと見てゐた。

さま〴〵の人間とさま〴〵の生活とが私の眼を掠めて通つた。あんなさびしい處からと思はれるやうな山の中から、わら沓を穿いた人だの、橇に乘つた人だのが出て來た。さま〴〵の天然の中にさま〴〵の人間の住んでゐるさまが、旅に出ると、殊に深く面白く思はれる。印象的といふことは、旅に出て殊に有意義に思はれる。ピエル・ロチのインプレッショニズムなどもさういふ處から出て來てゐる。外面的――繪畫的。うれが印象派の特色の最も著しいものであることを殊に深く思つた。

北國の海、北國の町、北國の住民、うれは唯單に私の眼を掠め

て通つたばかりだ。長く住んで、深く研究したなら、もつと内部の生活が詳しく分るであらうが、私は私の最初の印象を最も重んじたいと思ふ。風雪の中の海の色、それは何んな色彩を私の眼に齎らして來たか。私は暗澹たる海と言ふよりは、活力に富んだ凄じい海の奔騰するのを見た。一間先も見えぬやうな烈しい風雪の中を、汽車は凄じい煤烟を漲して、いかなる障碍物も物かはといふやうな勢で進んで行つた。停車場の名を書いた白い板も全く堆雪の中に埋れて、驛夫は外套の中から眼ばかりを出してゐた。雪の深い町では、庇の長く出た兩側に路をつけて、物賣店の並んだ中を、人は往つたり來たりしてゐる。そこには遠い處から來た旅

客を暖かい火燵に誘つて行く古風な旅籠屋などもある。大きな蟹の赤い足や生の鮭の子などの際立つて眼に附く魚市場などもある。其處からも此處からも人が出て來た。橇に乘つて行く人のあとから大きな犬が跟いて行つた。（大正二年二月）

紅葉山人訪問記

隨分もう昔だ。その頃のことを繰返して見ると、いつの間にか月日が經つたといふことが染々と考へられる。尾崎紅葉と書いた返事が來た時、自分は何んなに喜んだか知れなかつたが、其喜びももう想像が出來ない位薄い印象を殘してゐるに過ぎない。

明治二十三四年頃の紅葉山人の名聲はそれは隆々たるものであつた。紅葉、露伴と名を並べて言はれてゐたが、何方かと謂へば、

矢張紅葉の方が評判が好かつた。『色懺悔』『此ぬし』それから讀賣新聞に『おぼろ舟』を出した。

春の屋主人はもう其頃は餘り小説を書いて居なかつた。鷗外漁史もまだその處女作『舞姫』を世に公にしなかつた。其時分の大家號授與所に言はれた國民之友の春夏二季附錄には思軒、美妙、嵯峨の屋などといふ人達が書いてゐた。

紅葉山人の小説は艶麗な文章で聞えてゐた。それに硯友社の人達が常に其の周圍を取卷いてゐて、何處となく領袖といふやうな貫目があつたので、それで一層其頃の若い人達の渴仰の的となつた。

讀賣新聞で、露伴の『ひげ男』と紅葉の『伽羅枕』とを同時に掲載する計畫を立てたのは、あれは確か二十三年の春頃だつたと思ふ。兩花形が腕くらべをするといふので、ろれは非常な評判であつた。何方が旨いか、何方が成功するか、かうした聲は到る處で聞えた。私なども、町の角に大きく出てゐる畫看板を見て、ろの名聲にあくがれた貧しい文學書生の一人であつた。

紅葉は『伽羅枕』を牛込の北町の家で書いた。太田南畝の屋敷の中だとかいふ奥まつた小さな家で、裏には大きな樫の樹が笠のやうになつて繁つてゐた。八疊の前の庭には、木戸がついてゐて、ろこから、硯友社の人達は『居るかい』などと言つて入つて來た。

北町の通を私は其時分よく通つた。其小さな門に、尾崎と書いた表札がかけてあつて、郵便箱には硯友社と書いてあつたのを今でもはつきりと記憶してゐる。やがて讀賣に出た二つの作は、何方も讀む人達の心を惹いた。『ひげ男』は殊に評判がよかつた。『流石は露伴だ！』といふ聲が彼方此方から聞えた。それにも拘らず、露伴は五六回で筆を絶つて、飄然として、赤城の山中に隱れた。『伽羅枕』は百回近く續いた。

私は其頃、毎日辨當を持つて、上野の圖書館に出かけた。それで貴重書類の中から西鶴物などを借り出して讀んでゐた。また時には西洋の小説などを出して來ては讀んだ。西洋から入つて來た

文學と漢文學と國文學と、それから德川時代の戯作者の文學とが渦を卷いて亂れ合つてゐるといふやうなのが、當時の文壇の狀態であつた。私は解らずなりにも英吉利の文學をその頃かなりに讀んでゐた。サッカレーの『虚榮市』ニウカムス』ヂッケンスの『ヒックウイク』『二市物語』などを讀んだり、ウイルキーコリンスの『白衣婦人』『イビル、ジニアス』を讀んだりした。ワシントン。アービンクやブレット。ハートのものなどをも讀んだ。

ロシアの作家のことを書いた評論を一冊さがし出して、人の知らない寶でも得たやうにして一生懸命に讀耽つたことなどもろの忘れられない一つである。その本にはゴーコリだの、トルストイ

だの、顏が出てゐた。

二葉亭の『浮雲』は、其頃、文壇的に評判があつたといふほどでもなかつたが、それが一種の深い印象を當時の文學書生の群に與へたといふことは爭はれなかつた。浮雲——心理描寫——ロシヤ文學、とてもあの細かい彫刻のやうな筆致は眞似が出來ないと思はれてゐた。私は其頃であつたが、それともそれから一年ほど經つてからだか忘れたが、ロシア文學に就いていろ〳〵な知識を得たいと思つて、嵯峨の屋主人を神田のある下宿に訪ねて行つたことがあつた。主人は其時トルストイやガンチヤロフの話をいろいろして聞かせた。

で、私は紹介も何も無しに、紅葉山人に宛てゝ手紙を書いた。

其返事はすぐ來た。『君たちのやうな熱心家の爲めにこしらへた雜誌だから、ゐれに入會したまへ』かう言つて、千紫萬紅といふ雜誌の成規を添へてよこした。ゐしてゐの方の幹事は江見水蔭がしてゐるから、詳細はゐこに行つて聞き給へと附け加へてあつた。

で、私は初めて紅葉山人を訪ねた。

ゐれは二十四年の五月の二十五六日頃であつた。雨の晴れた、日影のをり〳〵射す、水蒸氣の多い日だつた。紅葉山人は其頃新に細君を貰つて、北町から横寺町へと移轉してゐた。新婚についての逸話は既に多く世の中に洩れて聞えてゐた。菊と紅葉の模樣の揃ひの湯呑茶椀の話などは、貧しい一文學書生を羨殺せしむるに十分であつた。ゐれに、其他にもいろ〳〵な話を聞いてゐた。

貧しい一文學書生――キャラコの黑の紋附の羽織に小倉の袴を穿いて、髪を長くして中央から分けた一青年は、玄關の隣の八疊から、庭に面した長い縁側を通つて、そのまゝ廣い二階へと案内された。縁側のところを通る時、若い細君の赤い手絡が、くつきりと白い横顔と一緒となつて見えてゐた。

机の傍の火鉢の前で、兼ねて逢ひたいと思つた作家と相對して坐つた時、私は言ふに言はれない喜悦を感じた。それに色の淺黑い、男らしい、誰に向つても城府を設けない物の言ひ方が、臆病

な私の心を和げた。私はいろ〳〵なことを話しかけた。

『矢張、西洋の物は讀むやうにしないと、駄目だね』

山人はかう言つて、『此間、アメリカに行つてる友達から、ゾラのものを送つて來たので、讀んでゐるが、それは隨分細かい。よくあゝ書けると思はれる位だ。坊さんが墮落するやうなところを書いたものだが、實によく書いてあるよ』傍に置いてあつた扇を取つて、ろれをひろげて、『丁度、この扇の襞のやうに、明るいところと、暗いところとが實に巧に書き分けてある……我々ももう少し何うかして、さういふところに出て行きたいと思ふが……中々難かしいね』

『これですか』

私はかう言つて、傍に轉がつてあつた一冊の洋書を取つた。ろれには ABBé Mouret,s Transgression By Emile Zolaとしてあつた。

ろれから私は英吉利文學の話だの、詩の話だの、西鶴の話だのを持出した。

西鶴に就いてはかう言つた。

『西鶴はちよつと分らん。あれは檀林の俳諧から出來たものだから、檀林の俳句から入つて行かなけりや、よく解らんねえ』

八疊の壁には、巖谷一六居士の書いた、新婚を祝つた幅物がかけてあつた。其頃、山人はまだ二十七八位であつた。私は一躍し

て大家となつた山人の幸福な生活を羨まずには居られなかつた。

二階からの眺めは廣々としてゐた。屋根の續いた上には、地平線が遠く晴れやかに望まれた。綠葉に射す日影、白いカンナ屑のやうな雲……

『富士が見えますね』

『夕方などは好いよ』

『それは好いですな！』

私はワザ〳〵緣側のところに立つて行つて四邊を眺めた。

私の家は其頃矢張牛込にあつた。

貧しい私の家は、其頃間數の多い家になど住むことは出來なかつた。私は三間しかない汚い家の中に居た。私は机を座敷の八疊の一隅に置いた。

机の前が硝子障子になつてゐるので、其處から猫の額のやうな小さい庭が常に見えた。投つたまゝにして置いた萬年青の鉢だの、丈の低い痩せこけた芭蕉だの、ボケだの、薔薇だのが見えた。時には明るい日影が射したり、雨がしめやかに降つてゐたりした。

私はいつもろこで日を暮した。

正午近くなると、豆腐屋の聲が彼方此方に聞えた。

『錄、お飯だよ』

半白髪になつた母親は、かう言つて隣の間から聲をかけた。

紅葉山人を始めて訪問して歸つて來た時には、自分の家が此上もない汚いみぢめなものに見えて、情けなかつた。疊のデコボコしたのも佗しければ、障子の紙の黒くよごれてゐるのも不愉快であつた。私は着物も着改へずに、長い間、机の前に坐つて、默つて考へてゐた。

『勉强する外仕方がない』

かう思つて、私は下唇を嚙んだ。

私はもう其頃、小説を二つ三つ書いて持つてゐた。それを二度目に行つた時、持つて行つて山人に見せた。山人は後で、二枚ほど直して批評をつけて送りかへして呉れた。

柳ちる千筋となでし黒髪も

かういふ句を二度目か三度目の時に山人は短冊に書いて呉れた。

それから、私は江見水蔭の家をもたづねた。

硯友社――根岸派――早稲田派――民友社派――やゝ後れて千駄木派などといふ名目が、其頃文壇にあつた。

作家は矢張硯友社に多かつた。出版書肆などの關係も硯友社が一番密接な關係を持つてゐたらしかつた。紅葉山人は「讀賣」ばかりではなく、春陽堂などといふ書肆にも大きな勢力を持つてゐ

た。

しかし全體の傾向から推して來ると、文壇の先頭に立つてゐるといふ方面ではなかつた。西洋の感化を受けた作家乃至作物は少なかつた。

硯友社同人の持つた一種通がつたイヤミと言つたやうなものに對しても反感を持つ人がかなり多かつた。

『文學者になる法』といふ皮肉なものを書いた不知庵（今の魯庵）や正直正太夫や、ろれに、民友社の人達も何方かと言へばうの向ふ側に立つた人達であつた。

民友社の人達は、政治と文學とを一致させたやうなテーストに

その基礎を置いてゐた。ビーコンスフイルド卿の小說などを持出した人もあつたやうにすら私は記憶してゐる。うして、此派には基督敎の影響が著しく及んでゐる。硯友社の人に言はせると、『あんなバタ臭いものは仕方がない』と言つた。實際さうであつた。うこからは、湖處子の『歸省』だの、蘆花の『夏の夜がたり』などが生れた。嵯峨の屋の自然を詠歎したやうな文章もその新聞に載せられた。

鷗外漁史は二十四年の中頃あたりから段々文壇に其姿を現はして來た。漁史がドイツから齎し來つた知識と學問とは、幼稚な當時の文壇を驚かせた。

廿四年の國民之友の夏期附錄に載せられたSSS同人の詩の翻譯、それから續いて『しがらみ草紙』の發刊、『舞姫』の發表――一時は文壇の評論界を席卷した概があつた。

『舞姫』と紅葉の『拈華微笑』が一緒に國民之友の春期附錄に出た。

紅葉の作に、『燒繼茶椀』(紬時雨)といふのがある。丁度、私が紅葉山人を訪問した頃に書いてゐた作だが、それは、鷗外漁史を主人公にしてゐるものだといふことを私は後に聞いた。

氣に入らない妻が夫に情を盡すといふやうなもので、素人うけはしなかつたが、よく書いてある作であつた。

『舞姫』は硯友社風の作品に對して、別に一旗幟を立てたもので あつた。淺墓な客觀藝術に對して眞摯な主觀藝術の發表であると言つても差支なかつた。當時褒貶相半ばしたが、兎に角新しい試みであるといふことには誰も一致した。

鷗外漁史の根岸派に近寄らなかつたのは面白い現象だ。露伴や思軒は硯友社の同人よりも無論鷗外漁史に近かつたが、しかも鷗外は根岸派に身を投じて、當時の大勢力である硯友社に當るやうなことはしなかつた。

で、一方には『浮雲』のやうな心理描寫があり、一方には硯友社のやうな雅俗折衷があり、思軒の翻譯文があり、鷗外の新しい試作があり、蘇峰三叉のハイカラな文章があり、湖處子、さがのやの新體詩があり、早稲田派の記實主義があるといふやうな文壇の空氣の中に、私はゾラを讀んだり西鶴を讀んだりするやうな一文學書生であつた。

紅葉山人の許には、其後も時々訪問した。

うの時分は鏡花、風葉などが段々うの玄關に居るやうになつてゐた。紅葉山人は新聞を書きはじめると、いつも留守をつかつた。私などもよくつかはれた一人だつた。

紅葉山人が初めての子を亡くした時の句に、

乳捨てに出れば朧の月夜かな
饅頭の數ほどもなき命かな

と言ふのがあつた。あの綺麗な細君からあの可愛い子が出來た。それさへ既に私のセンチメンタルな心を動かしたのに、うれが一年も經たずに死んだ……私は紅葉山人があの門の處で、うの子供を抱いてゐたことを思ひ出して、一種の悲哀に撲たれずには居られなかつた。

花々しい生活――さういふことが、山人を訪問する度に、いつも私の胸に上つた。實際、其頃紅葉山人位人に羨まれる生活をし

てゐる文學者はなかつたのである。友人も多かつたし、其周圍に集つて來る人も多かつたし、それに第一に收入が多かつた。いかな時でも來客の居ない時は滅多にないといふやうな生活であつた……。正月など年始に行くと、鏡花や風葉が袴をはいて、玄關のところにゐたりなどした。

いかにも江戸子らしい氣分の人で、議論もかなり好きであつた。常識を重んじて、そこから自分の實踐する道德を引出して來るといふやうなところがあつた。それに感情的でもあつた。

私は江見水蔭の家へもよく出かけて行つた。水蔭は其頃、元、紅葉の居た北町に住んでゐた。心置なく作の批評などをして貰へ

るので、後には紅葉の家よりも水蔭の家の方へ多く訪問した。八疊の座敷に經机を置いて、其處で水蔭は原稿を書いた。骨ばかりの提燈を封筒入にして吊して置いたりした。

それはある夜であつた。私が水蔭の家に行つてゐると、紅葉山人が裏からこつそり默つて入つて來た。

『もう歸つて來たのかえ？』

主人がかう言ふと、

『えらい眼に逢つたよ』

かう言つて、山人は旅で、旅籠屋で金を取られて、そこ〳〵に

歸つて來た話をした。『たしかに隣にゐた奴だがね、金ぐさりなんかして、變な風采をしてゐる奴だつた。ういつに違ひないんだ……で、仕方がないから、旅籠屋にさう言ふと、初めの中は、變な顏をして却つて此方を疑がつてるんだ。癪だつたけれど、旅に出ちや仕方がない。本名をあかして賴むと、幸ひ僕の名を知つてる奴がゐてね、ゐれから金を借りて、漸く歸つて來たよ』

何でもそれは小田原の酒匂あたりの話だと覺えてゐる。

水蔭と二人で、いかにも親しい友達であるかのやうに――他で聞いては、烏渡わからぬやうな符徵の入つた流暢な話し振、それが何んなに私の耳に羨しく響いたか知れなかつた

北町の大きな樫の樹の下から、だら〳〵と坂を下りて、家と家との間の細い通を通つて大通へ出て、それからまた坂を上つて、寺の墓地の傍を向ふに出ると……その二階家……戸が閉めてある。また寢てゐるな……。記念の多い二階家だ。

私のやうな文學書生の議論に、ゐれでもよく調子を合せて呉れたと今でも思ふ。『――ゐんなことを言ふなら、小說を書かん方が好い。小說は人が見るもんだからね、自分一人で藏つて置くもんぢやないからね』かうしたことを山人はよく言つた。

山人は退屈すると、錢湯に出かけて行つたり、大弓を引きに出かけて行つたりした。途中などで邂逅すと、『僕の家に來たのかえ、

これから弓に行くんだ、一緒に行き給へ』

などと誘つた。

大弓は獅子寺の中にあつた。今、勸工場のある奥の方にあつた。

ろこの主人も面白い男だつた。其處には硯友社の同人は皆な出かけて行つた。

何でも、結婚した當座の話だと思ふ。細君が大きな丸髷姿か何かで神樂坂の通りを遣つて來ると、其處でふと山人に邂逅した。

處が、山人が、『お買物ですか――』と笑つて聲をかけたので、細君はきまりがわるいこと一通でなく、顏を眞赤にしてよけて通つたといふ話はかなり名高い話で、ろの時分の文學書生は誰でも知

つてゐた。ろして誰も皆ろの花やかな生活を羨んだ。

神樂坂の毘沙門の緣日――

その賑やかな坂の上から、中町へ出る路と、北町へ出る路と、それから紅葉山人の住んでゐる横寺町へ曲る路と、この三つが今でも私にはなつかしい思ひ出となつてゐる。

北町の通では、ろの大きな樫の樹、ろれの西風に鳴る潮のやうな響、ろれから綺麗な娘の居た二階家の欄干、愛日學校の小さい生徒の群、ろれを通り越すと、通りが細く汚くなつて、何の興味をも惹かなくなつて了ふ。中町の通では刈込んだ綺麗な垣、槇や

檜の多い栽込の中の木犀のかをり、ろこから見た富士の姿は、東京でも多く他に見ることが出來ないやうな美しさを備へてゐた。

ろれから少し來て、菊を栽培する家の妹娘……砲兵中佐の總領娘……ある大名の家令の娘……

横寺町の通は、山手で名高い旨いどぶろくを賣る居酒屋、墓地を隔てゝ紅葉山人の二階の窓……

明治二十三四年頃から卅四五年まで、私はこの通りを何んなに歩いたか知れなかつた。戀にあくがれたり、名譽にあくがれたり、富貴にあくがれたりして、時には失望の心を遣るに場所がない爲めに、わざ〳〵其處に出て來たりした。私の家は牛込の山手の奥

欠

したが、かれを訪問した客は獨掌不浪鳴といふ字の書かれた細長い幅物がいつも床の間にかけられてあるのを見落すことはなかつたであらう。獨掌不浪鳴……それには何かかういふ最期になつて行く意味があるやうだ。

北山伏町に住んで居る頃、一番よく私は訪問して行つた。

朝は十時頃出かけて行つても、まだ寢てゐた。

『昨夜、徹夜したもんだから――』

かう言つて眼を赤くして出て來た。

『何うも、思ふやうに書けなくつて困る』『昨夜も三時間机の前に坐つてゐたけれども一行も書けないで困りました』かういふ風な

欠

ことをよく口にした。

雜誌などから頼みに行つても、締切間際になつて出來ないやうなことが度々あつた。

机に對しての苦悶――これは藝術家でなくつては知ることの出來ないものである。頭と筆と机とが三つ一緒になつて、手で筆を運んでゐるのが解らぬやうな興會に接した時は、王侯の樂みといへども更めずと言つたやうな快樂と得意とがあるけれど、一度頭と、机と、筆とが離れ〴〵になると、ゐの苦痛はとても普通の人では想像することが出來ないやうなものになつて來るのである。

さうなると、第一、机に向ふ氣になれない。机に向ふまでが既に

一方ならぬ努力を要する。次に、机に向つても筆を執る氣になれない。筆を持つても書く氣になれない。書き出しても、文章が旨く出て來ない……。

筆を持つたまゝ一夜を過したことなどもかれには少くなかつた。

かれは新しい傾向を理解することの出來る人であつた。ゾラや、ダンヌンチオなどを愛讀してゐた。

『死の勝利』の批評なども聞いたことがある。

私はゐの頃、山の手の奥の林のがけのやうなところに住んでゐた。

私は家を持つたばかりで、まだ妻も娶らず、書生と二人で自炊してゐた。其處へ、かれが一週間ほどやつて來て泊つてゐたことがあつた。

身を少時遠ざけて置かなければならないといふ譯があつて…。

私などに取つては、先輩なので、私は友人としてよりもいくらか丁寧な口のきゝ方をした。眉山と謂へば、其頃では、もう紅葉に次いでの大家であつた。

私は座敷の八疊をかれに借して、自分は自分の机を次の間の六疊に持つて來た。丁度十月頃で、裏の林がガサ〳〵と鳴る……竹藪がそよぐ……もずがをり〳〵けたゝましい聲でキ、と鳴く……

林の中には柞だの楓だのが一日毎に紅葉して行く……戸山學校で稽古してゐる銅鑼の音がサ、ラを叩くやうに聞えて來る……。

私は其時分レルモントフの『現時の英雄』のドイツ文を、字引を引き〳〵讀んでゐた。丁度ベッチョリンが、波斯に行かうとして、書いたものを一束にして友人に托さうとする旅舍の處であつた。私は讀んだ一節々々を話したり何かした。

月の明るい夜など、縁側に坐つて、茶などを點れて、いろ〳〵詩や小説の話をしたこともあつた。

私の母は其頃まだ生きてゐて、『川上さんといふ人は立派な方だね』と言つたことがあつたのを私はまだ覺えてゐる。

山手の滿天星の垣のあるやうな細い道、でなければ、下宿屋の二階から女が顏を出して覗いてゐるやうなところ、でなければ地平線の遠く見える、射的場の裏のやうな野道――さういふ所に、私はかれを置いて見ることが好きだ。

靜かな聲で、

『さうかねえ――』

かう言つて調子を合せた其姿は其處にも此處にも見えるやうな氣がする。

郊外散歩が好きで、よく私は一緒に出懸けた。早稻田田甫、戸

山の原、雜司ヶ谷、さういふ處へはよく出かけて行つた。護國寺の裏から雜司ヶ谷の墓地に出かけて行つたことなどもあつた。

秋も十月末になると、お題目の太鼓の音が到る處に聞える。ゐれがまた一種言ふに云はれない哀愁を催して來る。柿、栗、ゐれから續いて木枯、落葉、――私達はよく一緒に歩いた。

生活難と言ふことが大分言はれた。

眉山の死は生活難だと言つて、ゐの生活の細かい收支までを調べて書いた新聞などもあつた。

多くの友人達は、友人の情として、生活難とも藝術難とも言は

せたくなかつた。一時、無意識的の不可思議の事件として、それを解釋しやうとした。

茅ヶ崎の病院で、其時既に死に瀕してゐた獨歩は、

『眉山の死は藝術難なり。眉山は生活難によつて死ぬるやうな餘裕のない男にあらず』と言つてゐた。

私の考では、藝術難も生活難もあつたこと丶思ふ。けれど、私はその重なる原因をその肉體に歸したいと思つてゐる。其時ばかりではなく、かれは兎角不健全に陷るやうな一種の傾向を持つてゐた。上富坂にゐた頃には、眉山は狂したのではないかと評判を立てられたこともあつた。現に、高瀬文淵に與へた手紙にも、

『予は狂せりや』といふやうなことが書いてある。

また、ある時は次のやうなことを言つたことがある。

『僕は矛盾した父母の子だから、何うしたつて、矛盾した生活を送るやうな性質にならずには居られないよ』

かうした言葉を言ふ時には、ぱッと顏を赤くして、體を震はして言つた。あのおとなしい、温雅かな人に似合はないといふやうな激語をよく吐いた。

『僕には、いつか書きたいと思ふ思ひ出が一つありますよ。それは、僕の五歳から七歳位までの記憶で、旅から旅へと父母につれ